教科書文庫
4
810
41-1930
2000054740

中學

國文教科書

卷五

41810
教科書文庫
4
810
41-1930
2000054740

資料室

教科書文庫
4
810
41-1930
2000054740

文部省検定濟
昭和五年一月廿一日　中學校國語科教科用

吉田彌平編

中學國文教科書

巻五

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000054740

375.9
Y019

夏のスプルア

広島大学
教
54740
図書

中學國文教科書　卷五

目次

一　明治天皇の御製……北原白秋　一頁
二　春宵……夏目漱石　九
三　燕……薄田泣菫　一四
四　吉野山……藤岡作太郎　二三
五　村上義光……〔太平記〕　六
六　山荘雜記……荻原井泉水　三三
七　夕ぐれの時……堀口大學　四六

八 求め得る日……阿部次郎 四九
九 ハンニバル……矢野龍溪 五三
一〇 アルプの夏……槇有恆 六〇
一一 登臨賦……島崎藤村 六九
一二 フェロノサと芳崖……村松梢風 七三
一三 佛法僧……高濱虛子 八四
一四 熊野落……〔太平記〕 九八
一五 富士の靈……野口米次郎 一〇六
一六 國のしづめ…… 一一一
一七 齋藤別當……〔平家物語〕 一一四
一八 武士道……山路愛山 一一九

一九 遺言狀……乃木希典 一二八
二〇 佐橋甚五郎その一……森林太郎 一三三
二一 佐橋甚五郎その二……森林太郎 一四三
二二 世の中…… 一五三
二三 小松原……坪内逍遙 一五五
二四 日蓮上人……高山樗牛 一七七
二五 花芒……正岡子規 一八二
二六 狐塚……〔續狂言記〕 一八九
二七 氷川清話……勝海舟 一九八
二八 南洲遺訓……西鄉南洲 二〇四

目次終

中學國文教科書 巻五

北原白秋　名は隆吉　文學者　明治十八年福岡縣柳河町生。

一　明治天皇の御製

北原白秋

明治天皇は現神としての大自覺に立たせられた。此の神ながらの道に立ち、まことに聖帝として萬民の景仰を受けさせられた。その御製を拜すれば、王者の御風格が、大御心を通して、蒼穹のごとく、日輪のごとく、一天四海に輝きわたらせられる。歌柄といふ點から見れば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前には鞠躬如たらねばならぬ。帝王と凡下とはおのづからにして違ふ。これは天意であつて、如何ともいたしやうがない。

御歌所の歌調 故宮内省御歌所長高崎正風などを主とする桂園派の歌人の歌調

萬葉調 萬葉集の歌調

桂園調 桂園香川景樹を祖とする和歌の調

あさみどり澄みわたりたる大空の
　廣きをおのが心ともがな。

御製はおのづからなる歌調で、御歌所の歌調を遙かに超越しておはせられる。ある歌人が萬葉調でおはせられぬといふ點について遺憾の意を表してゐたが、萬葉調ならぬ點こそ御製の御製たるところではないか。要するに大帝の御製は實に大帝の御風格そのものであつて、桂園調とか萬葉調とかを以て評し奉るべきで無い。形式以上の大稜威がそのまゝの帝王調として流露し光被してゐる。私どものひたすらに欽仰し奉る所以は實に茲に存するのである。

眞の王道こそは大帝の踐ませたまふ絶對無二の天の道であつた。現神としての御自覺そのものが既に一の宗教でおはせら

れた。御製を一々拜誦するに、その殆ど總べてが、皇祖・皇宗を崇め、國を思ひ、民を惠み、四海の和平を求め給ふ御聲ならぬはない。これ我が國民の深く感佩し奉るべきところである。大帝は、人たるの道、子たるの道、言の葉の道を、あくまでも實に卽いて御詠み遊ばされた。その中には教訓中の教訓、道歌中の道歌として、純藝術以外の見地から拜せられる御製も少なくないが、純藝術と拜し奉るべき御作品も亦頗る多い。世の教育家宗教家・道學家たちは、御製の眞純なる御風格を冒瀆し奉つて、その各自の道の爲に牽强附會してはならぬ。何となれば、大帝の御製は理趣のための理趣でなく、一に王者としてのさながらの御詠歎であらせられるからである。

人口に膾炙してゐる御製以外の御製によつて、大帝の御一面を

うかゞひ奉つても、私はほと〱歌人としての大帝を思慕し奉るの情に堪へない。

誰人もまだそこに言及したものが無ささうに思はれる。よつて余は敢へて茲に其の種の御製を謹鈔して、歌壇の人々の拝誦を希はうと思ふのである。

庭菊

この秋もところどころにきくの花
うゑてたのしむ九重のには。

をりにふれて

庭のおもは若葉しげりて、すゞかけの
花さく頃となりにけるかな。

朝顔

しばがきにまとひあまりて、萩の葉の
末にもさけり、朝顔の花。

秋風寒

宮のうちもふくかぜさむくなりにけり。
山べはいまや時雨ふるらむ。

をりにふれて

小山田のをしねかるべくなりぬらむ、
庭の薄もほにいでにけり。

をりにふれて

冬がれの芝生の菫さきにけり、
小春の日影さしわたりつゝ。

雨中萩

するまではまださきみたぬ秋はぎの
花うちみだり村雨ぞふる。

花ぐはし櫻もあれど此やどの世のこゝろを我はとひけり

明治天皇宸筆

花ぐはし櫻もあれど此やどの世のこゝろを我はとひけり　明治天皇が向島小梅の徳川公爵邸(水戸)へ行幸の後、間もなく特に公爵家に下賜された御製

禁庭萩

昔わが折りてあそびしはぎの戸の
花もこのごろさかりなるらむ。

秋月明

ともしびをかゝげぬ方に來てみれば、
いよ〳〵あかし、秋の夜の月。

里

うつせみの代々木の里はしづかにて、
都のほかのこゝちこそすれ。

菫

をさなごにつませまほしと思ふかな
菫花さく庭をめぐりて。

峯雪

こがらしのふきはらしたる空遠く
甲斐のたかねの雪ぞ見えける。

子

思ふことおもふがまゝに言ひいづる
をさな心や、まことなるらむ。

蝸牛

世のさまはいかゞあらむと、かたつぶり
　をり〳〵家をいでて見るらむ。

見花

高殿の窓てふ窓をあけさせて、
　よもの櫻のさかりをぞみる。

何等の滯りもあらせられぬ。その思無邪は天の思無邪である。

良寛の歌はよいと云ふ。しかし良寛以上に大帝の御製は眞率で無心であらせられる。良寛は天成の童心者であつたであらう。しかし、かの思無邪の境涯は禪家としての修道と忍苦とから更に深められて、始めて幼子の心に還つたものにちがひない。大帝は抑からそのまゝであらせられる。禪家の悟入やそれに附纒ふいやみが些かもあらせられぬ。この純眞無垢こそは天

思無邪　詩三百、一言以テ蔽レフ之ヲ。曰ク、思無シレ邪。（論語）

良寛　隱逸歌人　越後出雲崎の人　天保二年（二四九一）寂　年七十四

意である。良寛の歌を渇仰する歌壇は更に天衣無縫とも申すべき大帝の御製のある事に心を留めねばならぬ。

太古にして太新、蕩々乎として天の如しとは、まことに聖帝明治天皇の大御心であらせられる。（季節の窓）

二　春宵

夏目漱石

山里の朧月夜に乘じてそゞろありきをする。觀海寺の石段を登りながら「仰數春星一二三」といふ句を得た。余は別に和尚に逢ふ用事もない。逢うて雜話をする氣もない。偶然と宿を出て、足の向くにまかせてぶら〳〵するうち、つい此の石磴の下に出た。しばらく「不許葷酒入山門」といふ石を撫でて立つて居たが、急に嬉しくなつて登り出したのである。

蕩々乎として天の如し　子曰、大ナル哉堯之爲ルレ君也。巍々乎トシテ唯天ヲ爲スレ大ナリト。唯堯則ルレ之ニ。蕩々乎トシテ民無シレ能ク名ヅクル焉。（論語）

夏目漱石　名は金之助　文學者　江戸の生　大正五年歿　年五十

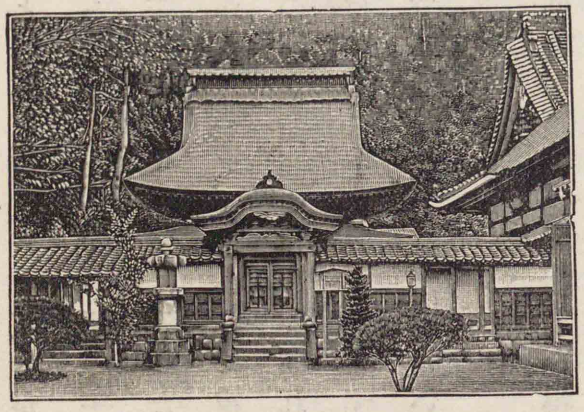
觀海寺　大分縣速見郡別府溫泉の近くにあるが必ずしもそこといふのでもあるまい

五山　建長寺、圓覺寺、淨智寺、淨妙寺、壽福寺

石段を登るにも骨を折つては登らない。一段登つて佇むとき、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として我が影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寐ぼけた空の奥から小さい星がしきりに瞬をする。句になると思つて又登る。かくして余は到頭上まで登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。むかし鎌倉へ遊びに行つて、いはゆる五山なるものをぐる／＼尋ねてまはつた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、やはりこんな風に石段をのそり／＼と登つて行くと、門内から黄いろな衣を着た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれちがつたとき、坊主が鋭い聲で「何處へ御出でなさる」と問うた。余はたゞ「境内を拜見に」と答へ

て同時に足をとゞめたら、坊主はすぐに「何もありませんぞ」とひ捨てゝすた／＼下りて行つた。



圓覺寺

あまり洒落だから、余は少し先を越された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭をふりたてふりたて、遂に姿を杉の木の間に隱した。其の間かつて一度も振返りはしない。成程禪僧は面白い。きび／＼して居るなと、のつそり山門を這入つて見ると、廣い庫裡も本堂もがらんとして、人影はまるでない。余はその時に心から嬉しく感じた。世の中にこ

んな洒落な人があつて、こんなに洒落に人を取扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を心得て居たからといふ譯ではない、禪のぜの字もいまだに知らぬ、唯あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

かうやつて、美しい春の夜に何等の方針も立てずに歩いてゐるのは實際高尚だ。興來れば興來るを以て方針とする。興去れば興去るを以て方針とする。句を得れば得たところに方針が立つ。得なければ得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。

「仰數春星一二三」の句を得て石磴を登り盡した時、朧に光る春の海が帶の如くに見えた。山門を入る。絶句は纏める氣にもならなくなつた。即座にやめにする。

又平　江戸時代の初期の畫家　大津繪の祖

石を甃んで庫裡に通ずる一筋道の右側は岡躑躅の生垣で、垣の向ふは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で幽かに光る。數萬の甍に數萬の月が落ちた樣だと見上げる。何處やらでしきりに鳩の聲がする。棟の下にでも居るらしい。

雨垂落の處に妙な影が一列に並んでゐる。木とも見えぬ、草では無論ない。感じからいふと、又平のかいた鬼の念佛が念佛をやめて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで一列に行儀よく並んで踊つてゐる。その影が又本堂の端から端まで一列に行儀よく並んで踊つてゐる。朧夜にそゝのかされて、鉦も撞木も奉加帳も打捨てゝ、誘ひ合せるや否や此の山寺へ踊りに來たのだらう。

近寄つて見ると、大きな覇王樹である。高さは七八尺もあらう、

絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて、柄の方を下に、上へ〳〵と繼ぎあはせたやうに見える。あの杓子が幾つ繋がつたらお仕舞になるのか、わからない。今夜のうちにも廂をつき破つて屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來るときには、何でも不意にどこからか出て來て、ぴしやりと飛びつくにちがひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちに段々大きくなるやうには思はれない。杓子と杓子の連續が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹は世の中にたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。（鶉籠）

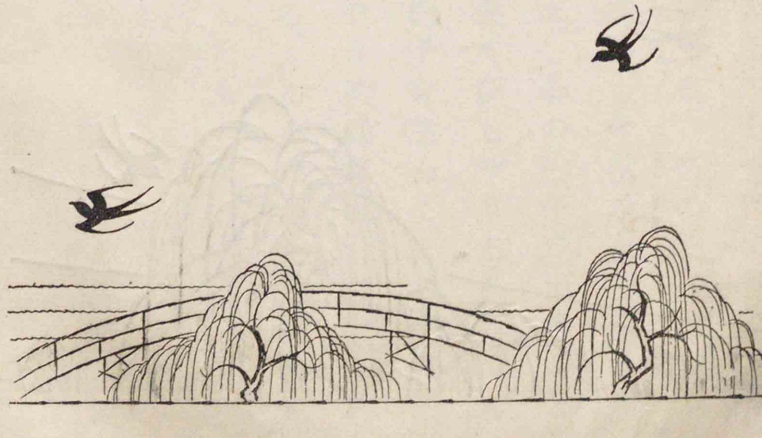
三　燕

薄田泣菫

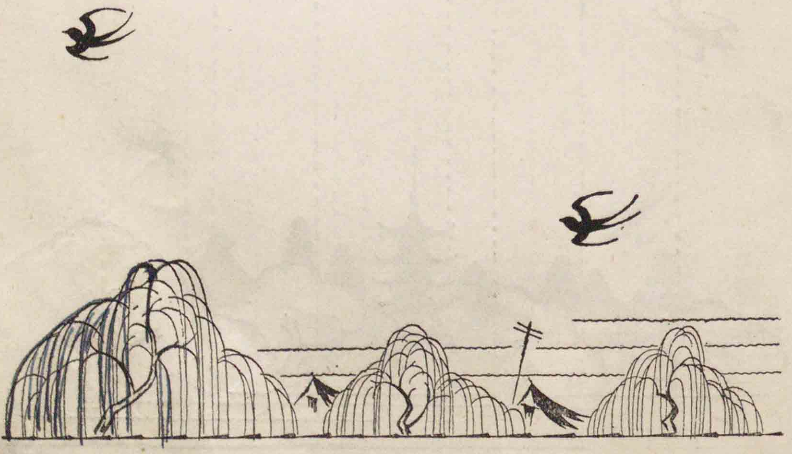
薄田泣菫　名は淳介　文學者　新聞記者　明治十年岡山縣連島町生

軒の古巣をたちはなれ、
背戸の柳の木傳ひに、
覺束なげの音にたて〻、
羽試むる燕。
一つ飜る〻野の花に、
春の香高くしみ渡り、
瑞枝を染むる日の影の
花やかにさす朝ぼらけ、
翼しめりて立ちいづる
汝が世はげにも幸ありな。
その紫の淺くとも、
やがて木の葉に身をのせて、

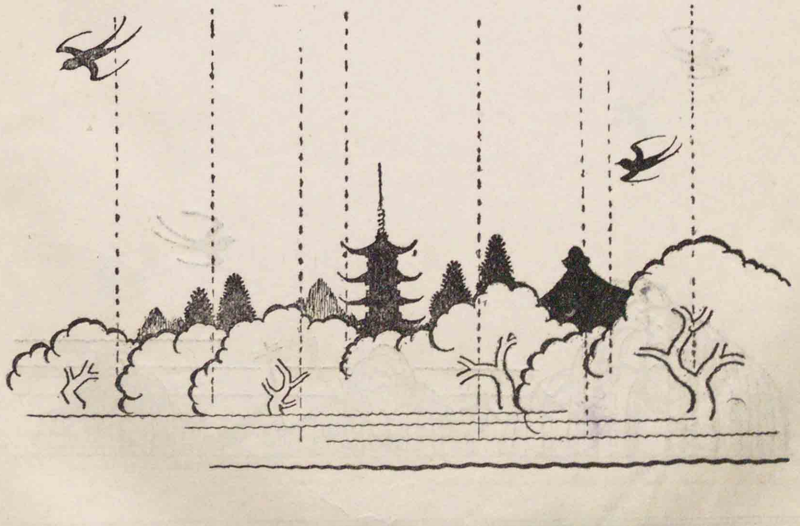
八重の潮路を越えぬべき
羽とし見れば力あり。
歌ふ音色の若くとも、
やがて霞める青柳に、
かの新月を呼びいづる
それと思へば調べあり。
小波ぬるむこもり沼の
水際の泥をついばみて、
はにふが軒を柱礎に
興せる壁を塗る見れば、
汝は才ある工匠かな。



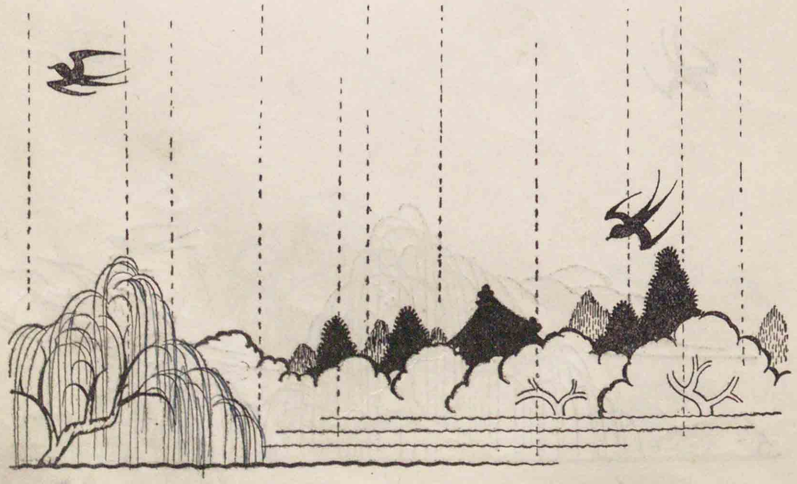
東風かろき城の春、
花の彩雲穿ち來て
獨り興ある物狂、
右にかけりて色を蹴り、
左に飛びて香を碎き、
こぼるゝ露に驚きて
花より花に迷ひ入り、
風も仇めく夕暮の
鐘にうたれて飛びくれば、
上羽にしめる移り香や、
醉うて眠れる佐保姫が
鬢の油やこれならし。



煙に似たる春雨の
一村こめて降りしかば、
花の枝より湧きいづる
桃の美酒酌みあきて。
新發意が讀經聲細く、
花散る寺の層塔に、
光まばゆき夕なぎの
西の方をば夢みつゝ、
噫、あゝ鳥と名は呼べど、
人にしられぬ一すぢを
胸にひめずや、燕。



青葉がくれに仄見ゆる
石榴の花のくれなゐに、
片笑みて鳴く雀子の
その木傳ひも何かせん。
情は深き女子の
乳房を含む稚兒に似て、
さはれば靡く青柳の
糸にすがれるふりを見よ。
東雲早く巣をたちて、
雲の旗手を靡けつゝ、
朝羽を振ふ蘆田鶴の



舞の姿は何かせん。
風に吹かるゝ楢の葉の
尾上(をのへ)越ゆるも忍ばれて、
雲紅の夕ばえに、
飄り行く姿かな。

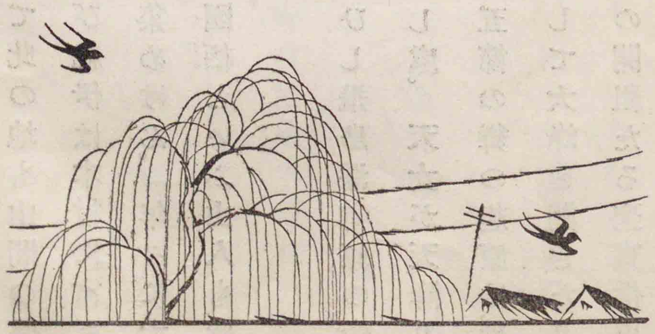
圓き頸(うなじ)は葉隱れに
かゝる葡萄を見る如く、
胸の和毛(にこげ)の白妙は
をさなき子らが肌に似て、
瞳子の色のらうたさは
潮にすめる一つ星、

上毛の艶の紫は
冠に彫れる玉の色。
鳥よ羽振につかれなば、
觸れてやさしき夕影に
藤波なびく下がくれ、
若紫のはなめでて
天の快樂(けらく)を味へよ。
彈くや大絃小絃の
風に亂れて鳴る如き
なれがすさみの歌聞かば、
誰かは憂(うさ)を忘れ井の
水銹(みさび)に似たる身をすてゝ

ふりさけ見れば紫の
雲の行方を慕はざる
あゝうら若き吾が友よ、
ゆめ梟のさかしらに
光な避けそ葉がくれに。
こもり沼に立つ青鷺の
かひなき事をわづらふな。
朝日に舞へば光あり、
夕日に鳴けば韻あり、
風に色あり、野に香あり、
森に歌ある夏の日の

あかぬ快樂を求めずや。
花にたぐへるかんばせは、
寶ならずや若き身の。
歌にうるめる目の色は、
譽ならずや、若き身の。
飛べや、梢の燕、
行方はそれと知らねども、
嫉しと思ふ汝が旅の
袖ひきとめん吾が身かは。

（泣菫詩集）



藤岡作太郎　國文學者　文學博士　東京帝國大學文科大學助教授　石川縣金澤市生　明治四十三年歿　年四十一

四　吉野山

藤岡作太郎

景色よき地には歴史上のゆかしさなく、歴史上にゆかしき地に

飛鳥淨御原の帝　天武天皇

役行者　名は小角　文武帝の頃の人

聖寶僧正　延喜九年(一五六九)寂　年七十八

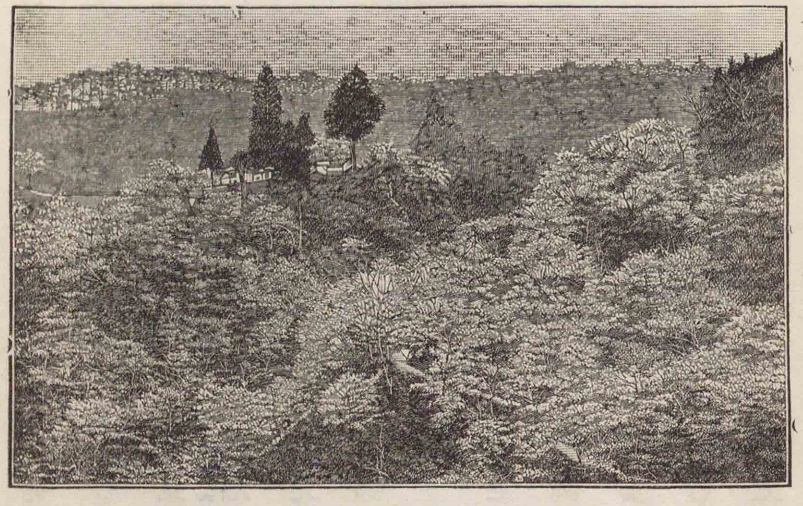
は景色に風情なきもの一ゝ世には多かるに、景色と歴史とを兼ね備ふる、これ吉野が天下無雙の名區たる所以なるべし。抑〻大和は人皇以來最も古く開けし國なれば、從つて此の地も山間の僻地ながら、よく世に知られけらし。南和及び紀伊は木材に富みたる處、それを都に運ぶには、先づ此の地に集めけん。年々に大宮に參りて毛の荒物、毛の和物を貢ぎける國栖といふ山人も、此のあたりにや住みけん。

世やゝ降りては、虎を野に放つと謠はれ給ひし飛鳥淨御原の帝が世を避けて、風雲に乘ぜん勢を養ひ給ひし處。天女が天降り袖飜し舞ひて大御心を慰め奉りぬといふ五節の舞の起原は、袖振山にその名を留めたり。葛城の神を役して大峰を開きたりといふ役行者は熊野よりわけ入り、醍醐寺の開祖たる聖寶僧正

源廷尉　檢非違使尉源義經

兄　佐藤繼信

弟　佐藤忠信



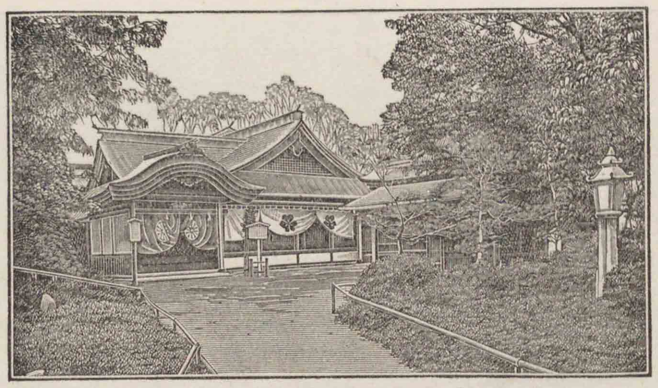
吉野山

は、こゝより大峰に分けいりしなるべし。爾來大峰を奧院とし、吉野を本院として、參詣する者跡を絶たず、金峰山寺の山僧は南都・北嶺と肩を比べぬ。

源廷尉が昨日に變る今日の恨、屋島に寵臣の兄を失ひしは、痛ましけれど勝利に誇りし時なり、今その弟を失ふ失意落膽の時、英雄の涙そも如何なりけん。その後數世、建武中興の政亂れて、吉野朝五十七年、かゝる山中

延元帝　後醍醐天皇

を都と定め給ひけるよ。



吉水神社

花咲き花散る時、聖帝の思、月盈ち月虧くる時、百官の涙。かゝるあはれは古に見ざるところ、後の世にもまた有りなんや。

延元帝の御製に、

都だに淋しかりしを、雲はれぬ吉野の奥のさみだれの空。

村上義光は大塔宮に代りて骨を櫻の陰に埋め、楠木正行は君に名殘を惜みて雲の中より出づ。草木無情、春に榮ゆることその後幾度ぞ。運命の寵兒豐太閤は、將卒・妻子を率ゐて此處に豪

行尊　天台座主　長承四年(一七九五)寂　年七十九

花より外に　もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし(金葉集)

やがて出でじ　吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん(新古今集)

益軒が筆　貝原益軒の和州巡覽記

鈴の屋　本居宣長の號

貞室　安原氏　俳人　延寶元年(二三三三)歿　年六十四

遊し、盃を擧げて花に對し氣を吐くこと千丈、古の英雄が失敗の跡をや笑ひけん。

大僧正行尊は「花より外に知る人もなし」と知己の得難きを恨み、西行法師は「やがて出でじと思ふ身を」と言ひて妄語の誹をや得けん。獨り天下の名所を探る蕉翁が風流、母に侍して一生の望足れりとする山陽が孝行。その名所を記すること質にして要を得たるは益軒が筆、鈴の屋が菅笠日記なども永く人に忘れられざらん。一句にして吉野を盡せるもの、名所としては、貞室が

これは〳〵とばかり花の吉野山。

舊跡としては、支考が

歌書よりは軍書に悲し吉野山。

などあり。かばかり名だたる地にして古人の筆の至れり盡せ

村上義光

（菊地容齋筆）

支考　各務氏　俳人　享保十六年（一七三一）歿　年六十七

さる程に　元弘三年閏正月朔

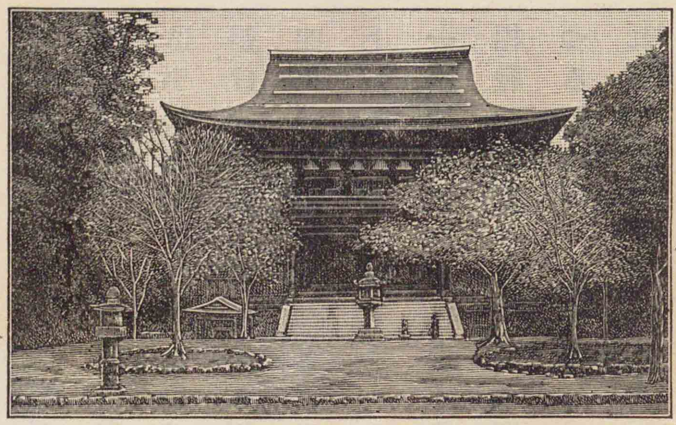
るを、今更にわれらが幼き筆に何をか言はん、何をか記さん。

（東圃遺稿）

五　村上義光

さる程に、搦手の兵、思ひも寄らず勝手の明神の前より押寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つて懸りける間、大塔宮、「今は遁れぬ處なり。」と思召切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋縅の鎧の、まだ巳の刻なるを透間もなく召され、龍頭の兜の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挾み、劣らぬ兵二十餘人、前後左右に立ち、敵のむらがつて控へたる中へ走り懸り、東西を拂ひ、南北へ追廻し、黒煙を立て、斬つて廻らせ給ふに、寄手大勢なりと雖も、僅かの小勢に斬立てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へ颯とひく。

敵引けば、宮は藏王堂の大庭に並み居させ給ひて、大幕打揚げて最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頰さき、二の御腕二箇所突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の如し。然れども立つたる矢をも拔き給はず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大盃三度傾けさせ給へば、木寺相模四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫いて宮の御前に畏り、戈鋋劍戟を降らすこと電光の如くなり、磐石岩を飛ばすこと春の雨に相同じ。然りとは雖も、天帝の身には近づかで、修羅彼が爲に破



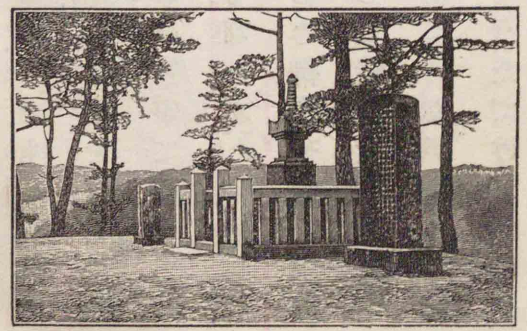
吉野藏王堂

漢・楚　漢王劉邦と楚王項籍
樊噲　漢王の臣

らる。」と、はやしを揚げて舞ひたる有様は、漢・楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが劍を拔いて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら帷幕をかゝげて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。

追手の合戰急なりと覺えて、敵味方の鬨の聲相交りて聞えけるがげにも其の戰に自ら相當ること多かりけりと見えて、村上彦四郎義光、鎧に立つところの矢十六筋、枯野に殘る冬草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前に參つて申しけるは、「追手の一の城戸いふがひなく攻破られつる間、二の城戸に支へて數刻相戰ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴の聲すさまじく聞え候ひつるについて參つて候。敵既にかさに取上げて、味方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てん事今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢を餘所へ廻し候はぬ前に、一方より打破つて、一先落ちて御覽あるべしと存じ候。但し後に殘り留つて戰ふ兵無くば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵何處迄も續きて追懸け參らせんと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と御物具とを下し賜つて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り進らせ候はん。」と申しければ、宮「爭でかさる事あるべき。死なば一所にてこそともかくもならめ。」と仰せられけるを、義光詞を荒らかにして、「かゝる淺ましき御事や候。漢の高祖滎陽に圍まれし時、紀信高祖の眞似をして楚を欺かんと請ひしかば、高祖之を許し給ひ候はずや。斯程にいふがひなき御所存にて、天下の大事を思召立ちける事こそうたてけれ。はや、其の御物具を脱がせ給ひ候へ。」と申して、御鎧の上帶を解き奉れば、宮げにもとや思召しけん、御物具・鎧直垂まで脱ぎ替へさせ給ひ

て、「我若し生きたらば、汝が後世を弔ふべし。共に敵の手に罹らば、冥途迄も同じ岐に伴ふべし。」と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南へ向つて落ちさせ給へば、義光は二の城戸の高櫓に登り、遙かに見送り奉り、宮の御後影の微かに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうを露はして、大音聲を揚げて名のりけるは、「天照大神の御子孫神武天皇より九十六代の帝後醍醐天皇の第二皇子一品兵部卿親王尊雲、逆臣に滅され、恨を泉下に報ぜん爲に、只今自害する有様見置きて、汝等の武運忽ち盡きて腹を切らんとする時の



村上義光の墓

手本にせよ。」と言ふまゝに、鎧を脱ぎて櫓より下へ投落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖を押膚脱いで、白く淸げなる膚に刀を突立て、左の脇より右の脇腹まで一文字に搔切つて、腸摑んで櫓の板に投附け、太刀を口に銜へて、内臥に成つてぞ伏したりける。

追手・搦手の寄手是を見て、「すはや、大塔宮の御自害あるは。我先に御首賜はらん。」とて、四方の圍を解きて一所に集る。其の間に宮は引違へて、天の川へぞ落ちさせ給ひける。（太平記）

天の川　吉野の奥の地

六　山荘雜記

荻原井泉水

「此處は夜などは寂しいくらゐですが、どうかお出での支度をして置いたのですから、お氣に召しましたらごゆつくり。」

荻原井泉水　名は藤吉　俳人　紀行文家　明治十七年東京市生

小豆島　香川縣小豆郡の全體　瀬戸内海の東部にある島

淵崎村　小豆島の西南隅にある一村

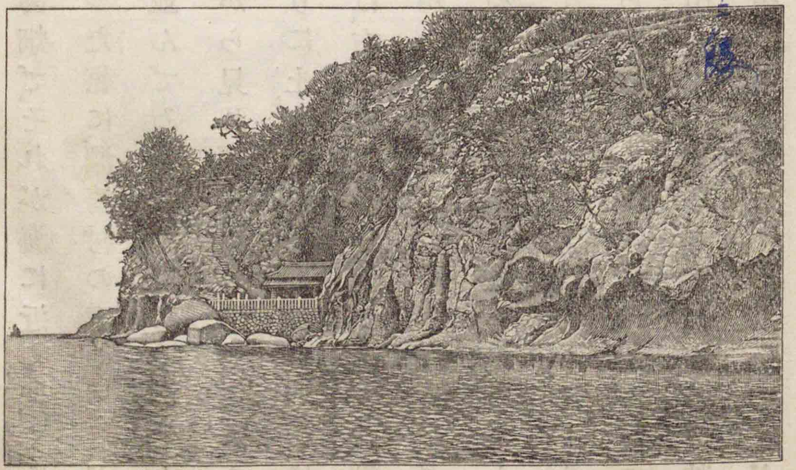
と、この山莊の主人のＩ君は言つた。

私がこの小豆島に渡つて來たのは、二年越しの約束によつてだつた。初めＩ君から、内海の風光を見ながら自分の家(うち)に逗留するやうにといふ好意ある言葉を受けて以來、その機會を見出し得ず、今日になつたので、その今日を島の同人は喜んでくれた。そして、Ｉ君は、山にある自分の別莊が、不便ではあるけれど、私の氣に入つたら、そこに寢泊りしてもいゝと言つてくれた。で、今朝はその山の別莊を見に來たのである。一足先に來た下女が掃除をして、障子を明け放して置いてくれた座敷に坐つて話しながら、私はこれから暫くは此處でゆつくり讀んだり書いたりすることの出來るのを嬉しく思つた。

此の別莊は淵崎村のＩ君の本宅から三町ほどの小徑を登つた

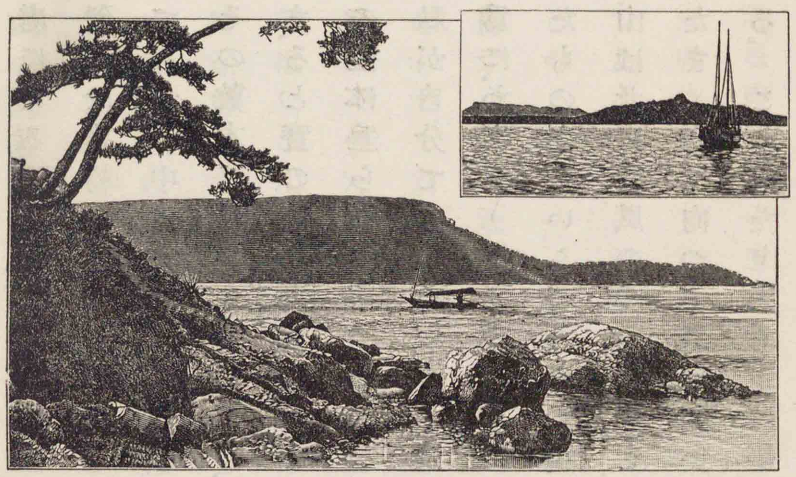
處にある一軒家である。山の傾斜には蜜柑の樹がみつしり植ゑてある。中にも、家の入口に近いその數本には、大きく、黃色く、まるまると實のつた夏蜜柑が、まだ枝の儘に垂らしてあつた。それは私が自分で木から取つて食べる爲に、わざ〳〵捥ぎのこして置いたものだといふことだつた。

山は北に屏風のやうな峰を負うたまゝ、南に向つて斜に開いて居る。このあたりから下は一面の



小豆島柳江洞

土庄町　小豆島の西南隅にある市街
屋島　香川縣木田郡湯元村　源平の古戰場
五劍山　香川縣木田郡牟禮村の北に峙つ山

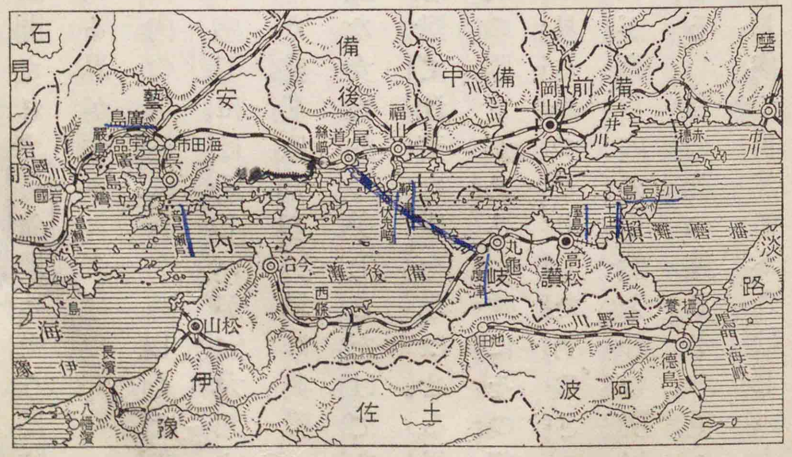


屋島五劍山

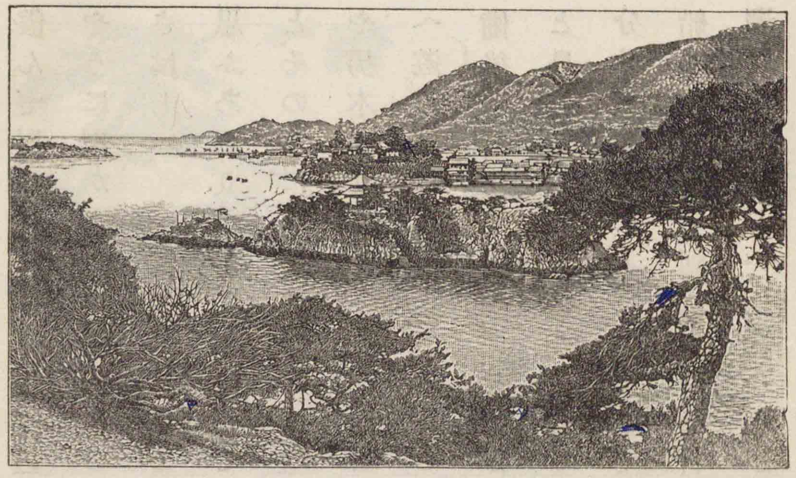
麥畑で、それが海に近く低くなつた裾に、淵崎村の家の屋根が並んでゐる。淵崎に續いて、上から見れば一つの町であるやうに土庄町が見える。そこには、右と左とから、池のやうに靜かな内海の水がくびれ込んでゐるが、右は深く狹い港をなして船が出入し、左は岬の一角から廣く沖に續いて、遠く讚岐の山々――屋島と五劍山とは特徵のある形で、認め易い――が

壇の浦　香川縣屋島の海岸にある長門の壇の浦と同名
男木・女木　共に瀬戸内海の島　香川郡に屬してゐる
多度津　香川縣仲多度郡多度津町
鞆の津　廣島縣沼隈郡鞆町
阿伏兎崎　鞆の津の西一里千年村にある
音戸の瀬戸　廣島縣安藝郡呉港の南口

霞んで居る。瀬戸内の景色は、かやうに麗かな日に眺めるのにふさはしい。かうして屋島の頂と思ふあたりに目を遊ばしてゐると、その下に開かれてゐる壇の浦や男木島・女木島、六年前にこちらへ遊んだ時通つた多度津の航路、備後へ越えて鞆の津、そこから島と島とが群れて舞つてゐる中を分けるやうにして廣島まで行く船の上の眺望、阿伏兎崎や音戸の瀬戸の輝かしい幻想などが順次



瀬戸内附近



瀬戸内海（鞆の津）

に展開されて蜃氣樓のやうに瞳に映る思がする。

瀬戸内の自然は豪快若しくは悲壯な感じには乏しいが、宏大又は雄渾な感じはする。單に典雅で華麗な女性的の美しさだけでなく、寡默で沈着な風を思はせる男性的の強さがある。殊にその親しみ易く、おつとりした明るさこそ私が瀬戸内の自然を好む所以である。私の此の感じから見れば、瀬戸内の自然にふさはしい人

弘法大師　名は空海　讃岐の人　高野山金剛峯寺の開山　眞言宗の開祖　承和二年（一四九五）寂　年六十二

四國八十八箇所　弘法大師に因める四國の八十八箇所の靈場

格は弘法大師の外にはないと思ふ。大師の教化は四國全體に、又この小豆島に遍く潤うてゐる。神祕な教義の鍵を握りながら、民衆の耳に入り易く說いて步かれた大師と、その使徒が振る錫杖の輪のりん〳〵といふ音とが、その昔、否、その昔から今日まで、麥畑に光を降らせる雲雀の聲のやうに、永劫變らず、人々の心に大悲の光を降らしてゐるのである。

弘法大師

りん〳〵といふ冴えた音が、遙かの山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音である。「お遍路さん」とは、何といふ親しみ深い言葉だらう。四國八十八箇所に殘された弘法大師の靈場を遍歷して步くの

がお遍路さんである。しかし、如何に信仰のためとはいへ、四國を一周することは、日數からも、努力からも、殊にお遍路さんに多い女の身としては、大抵のことではないので、四國の代りに、この小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積み得ることにされてゐる。「島四國」といふ言葉も出來てゐる。

遍路姿

島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふことである。岡山若しくは高松から來るお遍路さんは、多くは船で土庄港に着く。そしてそこから發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路を辿るのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、寂しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を浴びながら、海に近い麥畑を辿つて行く。それは繪である、美しいことである。この山荘にまで聞えるりん／＼といふ冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑かに、路を歩くのに好い氣持であり、又農事も比較的暇な四月頃に一番多く見受け

るといふことである。この頃島に着く船は、一日に何百人といふお遍路さんを渡して來る。一體遍路といふものが、いつの時代から始まつたものかは知らないが、大師の教門を弘くする上からいつても、各自の信心を厚くする上からいつても、よいことである。それればかりでなく、お遍路さんは、到る處で愛せられる、また惠まれる。お遍路さん同志も、遍路であるといふことのために互に信頼する、また扶助する。これが實によいことであると思ふ。未知の人たちが道連になつて親しんで行く。路を教へあひ、足らぬ物を足しあつて行く。

お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。そして、それは決して紛失しないといふことである。これは遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繋がつて

ゐるといふ意識から來るのである。この道に參ずるには、知識も修養も資格も、そんなものは何もいらない。婆さんでも、娘でも、男でも、女でも、たゞ一つの道を信ずることによつて、この尊い心持に一致することが出來るのである、鑽仰の聲が出來るのである。爭闘と欺瞞とに滿ちたこの社會の中にあつて、信頼と扶助とに心を合せて行き得ることほど美しいことが他にあるであらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、たゞ繪としてだけ美しいのではなく、彼等が愛しあひ、信じあふことに生きるが故に美しいのである。

そして、この事はひとり彼等お遍路さんの上のことばかりではない。私たちは皆人生の遍路である。めい〳〵に自ら負はなければならないものを負うて、自分の名を書いた札を撒き散ら

しながら、自分々々の路を遍歴してゐるのである。しかも私たちの周圍には、このお遍路さんに見るやうな信頼と扶助とが行はれてゐるであらうか。私は思ふ、「私はこのお遍路さんに學ばなければならない。遍路といふ行事を殘した弘法大師の暗示を感じなければならない。そして、人間の悉くがお遍路さんの心を心とするまでに到らないとしても、私たちはまづ信と愛とを以て人生を歩きたいものである。」と。

山莊の夕はなか〱暮れない。薄明るい光がいつまでも麥の穗に漂うてゐる。少しでもその明りのあるかぎり、雲雀は囀つて居る。雲雀は子供である。高い空に揚つて、自分が見て來た事を、話しても〱まだ話があるといふ風に饒舌つてゐる。かはゆい奴である。木立の梢にも夕の明りが殘つてゐる。どの

ランプ Lamp

木もどの木も銘々に自分の芽を若い葉に擴げようとしてゐる。同じやうな緣といつても、よく見ると、色の濃淡がそれ〲違ふ。形は勿論違ふ。かうして、どの木も自分の個性を伸ばして行くのである。若芽のすばらしい生長を見てゐると、私たちはなまけては居られないことを思ふ。夜はランプ一つ机に近く寄せて本を讀む。ランプの光に向ふと、私の家にまだ電燈の來なかつた頃の、少年時代の氣持になる。顏が火照りを感じるくらゐにランプの心を明るく出して、細かい字の辭書を繰りながら、むづかしい言葉の中から、正しい意味を掘り出さうと熱心に努力したものだつた。あの時代程の讀書に對する熱心が、再び私の心に燃えて來たやうである。私たちが讀まねばならず、又學ばねばならぬ事の豐かな積量が私を興奮させる。溫良な默想的

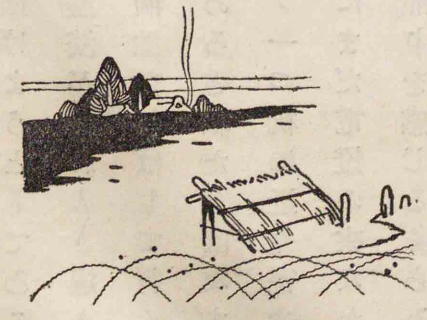
なランプの光を机の上に展べながら、私は此の山荘の夜に湛へられた限りなく靜かな「時」を限りなく尊く感じた。（山水巡禮）

七　夕ぐれの時

堀口大學

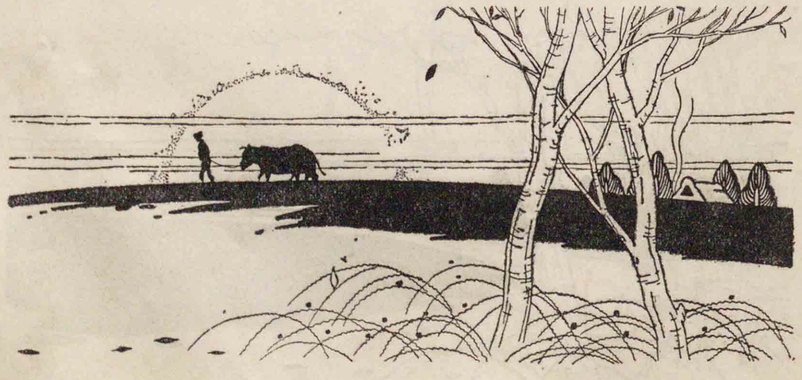
堀口大學　詩人　明治二十五年東京生

夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。
それは季節にかゝはらぬ。
冬なれば煖爐のかたはら、
夏なれば大樹の木かげ、
それはいつも神祕に滿ち、
それはいつも人の心を誘ふ。

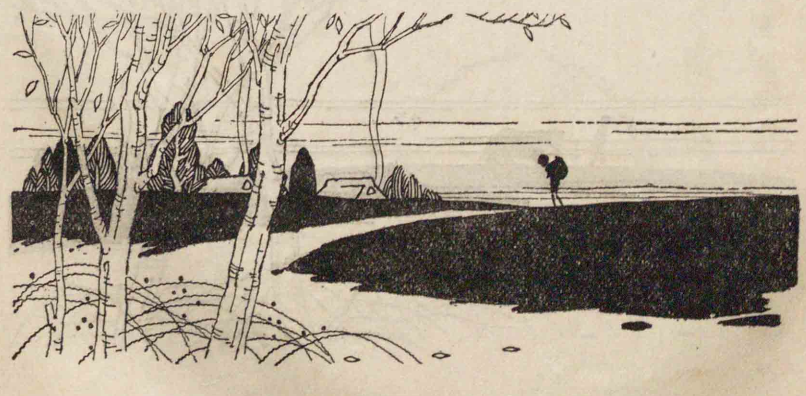


それは人の心が
ときにしばしば
靜寂を愛することを
知つてゐるものゝやうに、
小聲にさゝやき、小聲にかたる。

夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。
若さににほふ人々のためには、
それは愛撫に滿ちたひと時。
それはやさしさに溢れたひと時。



それは希望でいつぱいなひと時。
また青春の夢とほく
失ひはてた人々のためには、
それはやさしい思出のひと時。
それは過ぎ去つた夢の酩酊。
それは今日の心には痛いけれど、
しかも全く忘れかねた
そのかみの日の懐かしいひと時
夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。



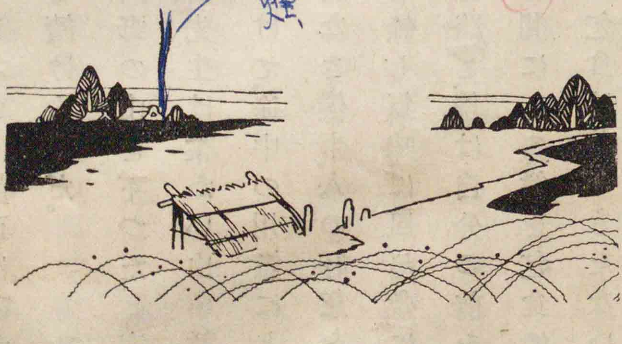
阿部次郎
哲學者
文學博士
東北帝國大學教授
明治十六年山形縣生

夕ぐれのこの憂鬱はどこから來るのだらうか。
誰もそれを知らぬ。
（おゝ！誰が何を知つてゐるものか。）
それは夜とともに密度を增し、
人をより強き夢幻へみちびく。
夕ぐれの時はよい時、
限なくやさしいひと時。
（遠き薔薇）

八　求め得る日

阿部次郎

自分のつまらぬことを知るものは上品の人である。下品の人



高野の山　和歌山縣伊都郡にある名山古義眞言宗の大本山金剛峰寺の所在地

神谷　高野山から北へ一里不動坂を下りた處

は、つまらぬ者なることを知つて、依然としてつまらぬ儘に止つてゐる。嚴密に言へば眞正に自覺せぬ者、眞正に碎かれざる者であらう。僕の心は未だ眞正に碎かれてゐない。眞正に碎かるゝ日の來るまで、僕はこの苦しい日夜を續けるのだ。

二三年前の夏、朝じめりする草を踏んで、高野の山を下つた。宿坊を出る時に、一箇月の馴染を重ねた納所先生は、柔かい白い餅に、細かに篩つた、稍青みを帶びた黄粉をつけて、途中の用意にと持たせてくれた。山を下れば食料の必要なき僕も、人の好意を無にせぬ爲に有難く之を受取つて、稍持て餘し氣味に風呂敷に包んで寺を出た。神谷の宿を出外れた岐路で、僕は自分の前を行く一人の乞食に追附いた。僕は咄嗟の間にあの餅を乞食にくれて荷物を輕くしようと思ひついた。乞食は其のきたない顏に美しい笑を見せて、「丁度ひもじくつて弱つてゐる所でした。」と、幾度も〳〵禮を言つた。さうして僕が輕く挨拶して通り過ぎる後から、繰返し〳〵嬉しさうに感謝の情をのべた。僕は人に物をやつてあんなに嬉しがられた事がない。人から禮を云はれてあんなに嬉しかつた事がない。僕は自分の餅をくれた動機を考へて恥かしくなつた。

僕は此の眞正に飢ゑた人を見て羨ましかつた。心の底から與へられた幸福を經驗する人を見て羨ましかつた。乞食は柔かい白い餅の返禮として眞正に求むる者の幸福を僕の眼の前に突きつけてくれた。此の迷へる生活から逃れて、むしろ彼の乞食になりたいと思ひながら、僕は重い心を抱いて山を下つた。三年後の今日も僕はまだ眞正に求むる者の幸福を知らずにゐ

ハンニバル Hannibal（前247-183）カルタゴの名將

矢野龍溪　名は文雄　全權公使諸陵頭等に歷任した　嘉永三年（二五一〇）豐後國佐伯藩生

ローマ Rome

る。僕は與へられる日よりも寧ろ求め得る日を待ちかねてゐる。併し道草を食ふことの趣味に溺れたる者には、待ちかねる日は恐らく死ぬまでも廻つて來ないであらう。（三太郎の日記）

九　ハンニバル　　矢野龍溪

英雄の成敗は千古傷心のこと少なからずと雖も、東西古今を通じてハンニバルの事の如く悲しきはあらざるなり。幼齡九歲の彼が、其の父に伴はれて神の卓前に立ち、國讐たるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより其の終焉に至るまで、一念常に國讐を報ずるに非ざるものなし。彼は二十七歲、人生の花とも稱すべき時、大兵を帥ゐて敵國に侵入せしより以來十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂みを享けたる跡なし。

諸邦　亞細亞諸邦

カルタゴ Carthago (Carthage)

大功成るに垂んとして果さず、ローマに窮追せられて諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を仰いで斃る。嗚呼、人生の慘なる、復此の人の如きを見ざるなり。

若し彼をして尋常人ならしめば、亦深く悲しむに足るものなし。然れども其の用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に、政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家に非ず、文ありて武なき文弱人に非ず、人格上一點の非議すべき所なく、而してその末路此の如し。是特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。

地中海を隔て、南北に對峙するものはローマ・カルタゴの二共和國なり。天は兩雄邦の並立を許さず、彼滅びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛ならじ。ローマ人は戰鬪を事とする尙武の民な

イスパニヤ España (Spain)　ピレネー Pyrenees　アルプス Alps

り、カ人は貿易を主とする平和の民なり。カ人をしてロ兵と戰はしむるは、羊を驅つて狼に向はしむるが如し。況やハンニバルの事に當りしは、既に其の國が一たび痛撃を受けたる後なるをや。本國人の頼むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼いで兵を屬領に募り、これを以て强敵に當らんとす、事固より既に非なり。彼豈これを知らざらんや。知つて而して是に出づる、また實に勢の已むを得ざるものあればなり。

ハンニバル

彼が志を決してイスパニヤを發するに臨み、其の兵幾ど十萬と號す。然れども、ピレネーの峻嶺を越え、アルプスの難路を過ぎ

ゴール Gaul

了へしとき、其の兵已に四分の一に減ず。彼がローマの北野に進みし時は、見兵僅かに二萬五千に過ぎざるなり。其の途上に於て兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令して曰く、「去らんと欲するものは去れ、從ふことを樂しむものは來れ」と。此の時に當りて將軍を棄てんとするもの數千人なりきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり。而して其の兵はイスパニヤ及びゴール北部諸種の蠻族より組成せるものゝみ。決して夫の愛國心燃ゆるが如きロ兵の比にあらざるなり。燕雜烏合の此の兵に對して、恩威の大なるものあるにあらざるよりは、焉ぞよく斯の如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、其の兵士は多く統一せる國民にして、愛國心あるものにあらざるはなし。唯それハンニバルに至つては即ち然らず。

アレクサンドル　Alexander the Great（前356–323）マケドニヤ王

フレデリック　Frederick the Great（1712–1786）プロシヤ王

ナポレオン　Napoleon Bonaparte（1769–1821）フランス皇帝

カンネーの大戰　Cannae　カンネーは古代イタリヤのアプリヤ州の首府　前二一六年ハンニバールは四萬の兵を以て八萬餘の羅馬軍を此處で破つた

其の將士は其の將軍に對して單に恩威を感ずるのみ、實に愛國の要素を缺けり。此の異樣の兵を以て彼の將來印度以西を統一すべき運命を荷へる勇壯絶倫、愛國無雙のローマ人に敵對し、一たびは幾ど之を壓服せんとしたるなり。嗚呼、此の人の外、千古復此の人あらんや。

獨り人品のみならず、其の戰鬪に長ずること亦古今無雙なり。アレクサンドル・フレデリック・ナポレオンと雖も其の上に出づるを得ず。是、余の私評に非ず、歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と強弱勇怯既に懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして、我は毎に寡兵なり。然るに猶奇戰には謀略を用ひ、正戰には戰術を用ふ。有名なるカンネーの大戰を見よ。彼の兵數は敵軍の半ばにも當らざりしに非ずや。しかも堂々たる正戰に於て、

彼は巧妙なる戰術を用ひ、敵軍をして七萬の死屍を戰地に遺して潰敗せしめたり。斯の如き全勝は、歷史上實に希有の事なりとす。戰地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指環數斛を、彼の使が本國に齎し歸りてこれを國會に示せる時、其の國人の驚喜は幾何なりしぞ。此の大勝に乘じて直ちにローマを衝かざりしは、後人の憾むる所なりと雖も、其の兵やもと甚だ多からず、加ふるに戰後の疲憊を以てす。此の危道を行かずとも、一方に於てイタリヤ南部の城邑は遙かに欵を送る勢あり、彼を捨て此を取る、亦理なしとせんや。此の戰の夕、一部將が「我に三千の騎兵を與へよ、將軍の爲に直ちにローマを衝き、二日を出でずして將軍をローマの城中に晩食せしめん。」と獻策せし時、彼既に其の得失を知る、必ずしも後人の非議を俟たざるなり。

彼の國人は必要大切の場合にも、曾て十分の援兵を彼に送りしことなく、十分の金穀を彼に與へしことなし。是、彼が十六年間敵國を蹂躪しながら、遂に其の成功を最後に誤りし大原因なり。實に本國人民の罪にして彼の罪にあらず。斯の如くにして彼は十六年間自ら兵を他國に募りて其の缺を補へるのみならず、其の金穀も常に之を敵國に取れり。其の忍耐の大なる、亦其の智略と並行すと謂ふべし。

彼は善く戰へり。彼は巧に外交を操縱せり。然れども其の本國は却て敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふべからざるに及んで彼を召喚して之に當らしむ。嗚呼、亦遲し。彼の智勇も之を如何ともする能はず。しかも猶此の存亡の秋に在つて敵と講和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方

ハスドルバル Hasdrubal (一前203) カルタゴの勇將

には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武弁ならんや。彼をして平時に出でしめば、必ずや治平の良宰相たらん。

其の未だ本國に召喚せられずしてローマの野に轉戰するや、兵寡く食竭く。恢復の望は單に懸けて其の實弟ハスドルバルがイスパニヤより援軍を率ゐて來り合するにありしなり。然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟はイタリヤの北野に破られ、彼が手を握りて久別の喜を敍せんと樂しみし其の人の首級は、敵の槍鋒に貫かれて、遙かに我が營前に現れたり。嗚呼、人生悲慘のこと多しと雖も、未だ此の人の此の時の如きはあらざるなり。彼が遙かに弟の首級を望みけるとき、我今カルタゴの運命を知

出師未捷　唐の詩人杜甫が諸葛亮を詠じた詩句
五丈原　諸葛亮の本營のあつた處　陝西省鳳翔縣にある
武侯　諸葛亮　蜀漢の忠臣
餘杭　今の浙江省杭州府
岳武穆　岳飛　宋の忠臣
槇 有恆　登山家　新潟縣長岡市生

れり」と歎ぜし一言は、如何に無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よりするもなほ忍ぶ能はず、況や自國の興亡は此の援軍の勝敗に懸れるをや。史を讀んでこゝに至り、巻を掩うて長嘆せざる者果して幾人かある。「出師未捷身先死」の五丈原頭の武侯や、盡忠報國の黥文を露して餘杭の市に斬られたる岳武穆も、亦何ぞ比するに足らん。

彼の戰略・戰術が人目を眩燿するがために、人或は其の名將たるを知つて其の人格を察せず。若し能くこれを究めば、其の不幸を悲しむ情、轉深きを加へん。千古傷心の事實に此の人の一生の如きはあらざるなり。（戰時畫報）

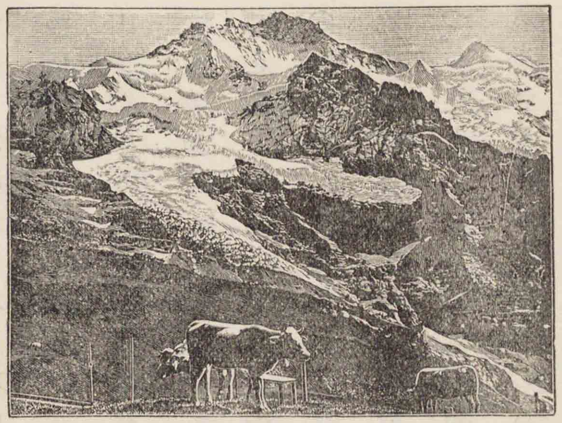
一〇 アルプの夏

槇　有恆

サンミカエル祭　Saint Michaelmas Day　九月二十九日に行はれるローマ教會の一大祭

初夏の滴る喜を心行くばかりに吸はうとするならば、アルプまで登らなければならない。アルプは見果てのつかぬお花畑の夢幻郷だ。足の踏み所もない程に咲く草花に身を横たへて雪山を仰いでゐると、森ばたに栗鼠が音を立てゝゐる。誠實な生活のかはゆらしい音だ。牛の群がまた登つて來る。アルプの草を追うて村から來るのである。一體アルプといふ語は、土地の人たちには夏期に放牧する雪線以下の山麓を意味するものなのである。山の裾の村人は、生活の必要物として牛や羊を持つ。主として牛が大多數を占めてゐるが、數多く持つてゐる者もあれば、又少ないものもある。何れにしても、彼等は晩春から雪の降りだす九月下旬、大抵九月廿九日のサン、ミカエル祭を最終として、各自所有の頭數だけ此のアルプに牛を放牧すること

が出來る。



アルプの牧場

山村が積雪から自由になつて、山麓にも若萌えが芽ざす五月の下旬、長らく待焦れたアルプ行の日が來る。其の日には、牧夫は黑の天鵞絨に赤縁を取つたチョッキを身に着け、皮の帽子を被つて先頭に立つ。次に山羊が二三匹續き、その後に年長の牛が大鈴を頸に下げて續く。此の鈴は農夫が家寳として誇るものであつて、古いのになると中世紀ごろのものがある。大きいのは直徑七八寸もあつて、多くは眞鍮で

エーデルヴァイス Edelweiss 高山植物の一種 みやまうすゆきさう

出來てゐる。外側にはエーデルヴァイスの浮彫などがあつて、一種の風韻を具へてゐる。それを幅の七八寸もある厚い皮の帶に下げて牛の頸に懸ける。此の先達牛の後に、十頭も二十頭も牛が續く。此の頃になると、村の道は毎日此の牛連れの行列で賑はひ、鈴の音は朝まだきから響き渡る。そして牧夫や牧童は紐の長い鞭を高く空に鳴らして、道草を食ふ牛どもを促して登つて行く。

青い空を戴き、雪の連峯を前にして、お花畑の上に、歌つたり想つたりしてゐることの美しい時よ。谷よりそよぐ風は遙かなる牧童の歌を夢幻の中に送り、山々は險しい面持をもつて人の胸に肉薄する。何といふ莊嚴な造化であらう。

六月も半ばを過ぎて、アルプを渡る風の烈しさも和らいで來る

リュックザック Rücksack 獨逸語で背嚢の義 登山に用ひる雜嚢
アルペンローゼ Alpenrose

と、峠の茶屋や展望の山のホテルなどは一齊に戸を開き、竈の煙を揚げて訪ふ人を待つ。登山鐵道も山麓の傾斜面を這ひだして上下する。リュックザックを擔つた男女の群は、アルペンローゼを帽や胸にかざして峠から峠へと歌つてあるく。皆强い高山の氣に打たれて、腕も顔も赭い。アルペンローゼに二種類あるが、何れも赤い花の咲く石楠花である。二つとも殆ど同じであるが、一方の葉は綠が若く、毛を持つてゐて、花が早く咲く。

アルプ登山

ティロール Tirol オーストリヤの最西部の州の名 東アルプ一帶の地方

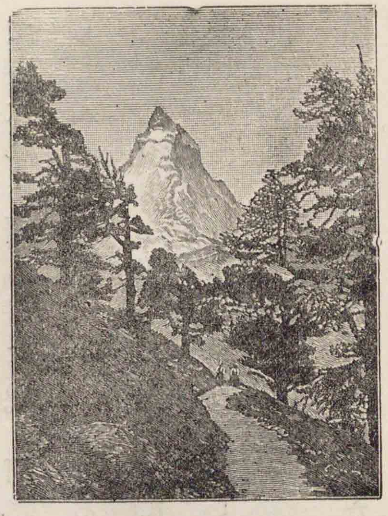
雪の高嶺の裾、荒々しい斷崖の端のあたりに群がり咲く此の可憐な花は、まことに詩に歌に詠まるべき美しい姫君である。しかも、ローゼとはいひながら、刺す刺も無ければ、平地の人に狎れて養はれる媚も持たぬ。何時も胸深く悲みを祕めてゐる。そして人の世に植ゑかへられると、愛撫の日をも喜ばず、異郷の土に故郷の山を想うて焦れ死に、死んでしまふ。たゞ山にある日のみ彼の花に幸は深く、淸い大氣を吸うて美はしい面をかざしてゐる。

櫻かざして若人の幸を歌うた昔もなつかしいが、テイロール帽に差した一枝のアルペンローゼに命の喜を思うて山路を歩むのも樂しい。

日影が北面の峯から全く逃れて、朝から谷一面に照りつけるや

フェーン Föhn 三四月の頃及び十月頃アルペンに吹く强風

うになれば、牧草も林も新綠が燃えるやうな瑞々しさになる。天鵞絨のやうにアルプを蔽ふ牧場の綠に見入つてゐる日は限なく麗はしい。何處を見ても荒廢の跡がない。滴るやうな若さだ。しかし黄金の光の雨降る日のみではない。地上が餘りに甘い喜に浸る時は、自然は必ず肩を聳やかし、聲を怒らかして威嚴を示す。フェーンの疾風に乘つた雲の群が峯に溢れて狂ひ叫ぶ時は、我等は命懸けだ。たゞ其の狂暴な意志の奔放を、小さくなつて見守つてゐるより仕方がない。しかし夏の間山村を一しきり搖がして忘れたやうに通り過ぎ



アルプの高峯マテルホルン

る。驟雨は、倦怠を掃ひ去つてくれる。

夕立雲は、前山の頂に涌きあがつたかと思ふ間に、雪の山に當つて卷きかへる。今まで陽氣であつた谷も光を失つて、空の御機嫌を伺つてゐるやうだ。その內に恐しく强い雷鳴が、峯から峯へ、崖から崖へと縱橫に駈廻つて轟く。豪雨だ。見る間に雲の下に露はれた崖に大きな瀑布が幾筋もしぶきを飛ばして、どう〳〵と落下する。山おろしの風が颯々と唐檜の森や村の上を渡る頃は、雨しぶきも薄らいで雷鳴は氷河の奥の方で迷つてゐる。谷には霧が昇騰し始める。小鳥が待ちかねたやうに囀る。驟雨は過ぎたのだ。雲の間から日光が矢のやうに射て牧場を照す。綠の焰だ。瀑布も細れて跡がまた消える。農家からは紫煙が緩やかにのぼる。忠實な妻女

エーテヤ Äther 氣

が夫や子供の夕食の支度をしてゐるのであらう。雨後の空氣は十分に濕氣を含んで柔かい。しかも爽かな匂が溢れる。若芽の香、靜寂な森のつく呼吸、はちきれさうな土の誘惑、そのエーテヤの中を、美しい小鳥の聲と牛の鈴の音とが天使の歌のやうに舞ふ。

日は西の山に沒した。川霧は立昇つて何處よりともなく集り、森の上にたなびく。谷と村とには靜かな暮の藍色が濃くなつて行く。その時である、頂と云ふ頂が悉く日を浴びて赫々と燃えるのは。焰なき、熱なき火だ。目が覺めるやうな透明な赤だ。微動すらしない沈みきつた色だ。その赤が次第に下から昇る紫に追はれて行く。そして紫より藍へと移つて、遂には頂の一點のみが映える。

メランコリヤ Melancholia 憂鬱症

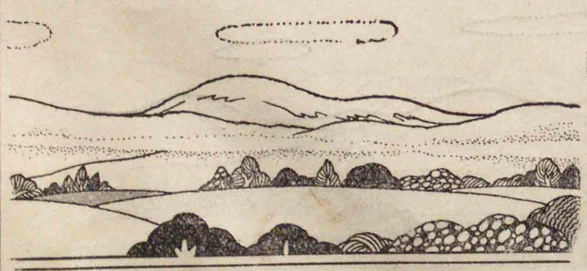
島崎藤村 名は春樹 文學者 詩人 明治五年長野縣木曾生

喜より沈思に、そして遂にメランコリヤに移るのが山の夕映である。（山行）

二一 登臨賦

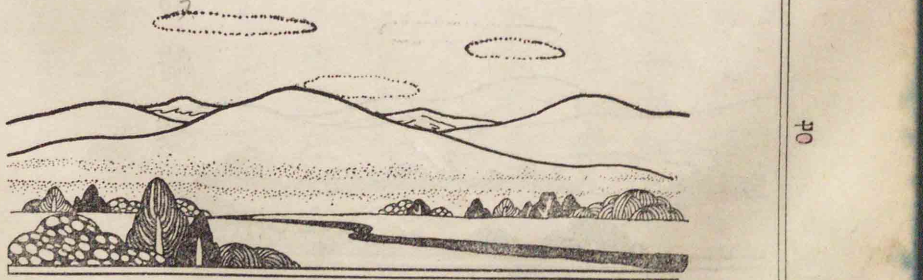
島崎藤村

高嶺に登り、まなじりを
きはめて望み眺むれば、
わがゆくさきの山河は、
目にも朗らに見ゆるかな。
みそらを淩ぐ雲のみね、
くだけて遠く青に入る。
こゞしく奇しき磐が根の
つらなりわたる山脈は、

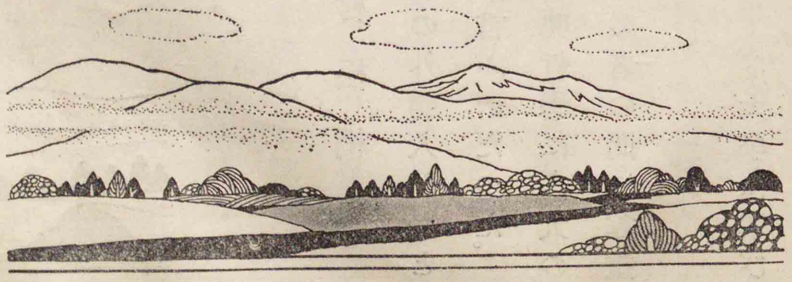


大山祇　山を掌る神

海にきほへる高潮の
驚き亂れ涌くごとく、
大山祇もゆるぎ出で、
わがたましひを奪ふかな。
誰かは譏り、誰が恨む、
翅をのぶるはやぶさは、
虚しき天の戸を衝きて
高きみ空にかけれども、
打振り打振る羽袖だに
引きとゞむべき雲もなし。
遠く緣におほはれて、
望をつゝむ野の方に、



ひがしに下る河波の
ゆくへを見れば、紫の
山の麓をうちひたし、
滔々として流れ去る。
あゝ大空に風吹けば、
雲おのづから飛ぶ如く、
迷の霧にこめられし
暗き谷間をあゆみ出で、
高嶺にあれば、時を得て
はるかにあがるわが心。
顧みすれば、越えてこし
山はうしろに落入りて、



フェノロサ　Fenorosa (1853—1896) 合衆國マサチユセッツ州の人明治十一年來朝

村松梢風　名は義一 文學者 明治二十二年靜岡縣生

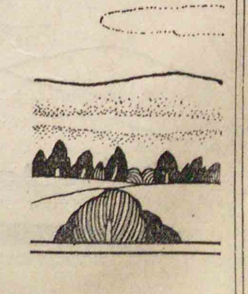
狩野芳崖　明治時代の畫家 東京美術學校教授 長門國長府生 明治二十一年歿 年六十一

芝公園　東京芝區にある公園 もと增上寺の山内

ハーバード大學　Harvard University

荒れにし森の影もなく、
寂しき野邊も見えわかず、
日の照すとも七重八重、
わが故鄕は雲にかくれて。

（藤村詩集）



一二　フェノロサと芳崖

村松梢風

或日、芝公園なる狩野芳崖の陋屋へ、突然一名の外國人がおとづれた。そして刺を通じて、畫論を聽きたいと言ふのだつた。この外國人は、東京大學の教師として日本の新興哲學に多大の貢獻をしてゐる外に、美術鑑賞家としても當時識者の間に尊重されてゐたアーネスト、フェノロサであつた。

フェノロサはスペイン系の米國人で、ハーバード大學に學び、卒

業の時には九十九點の最高點を取つたほどの天才である。當時東京大學に招聘されて來朝し、その專攻の哲學を擔任した外に、政治學・經濟學の講義をも受持つてゐた。

彼が日本美術の研究に着手した動機は、彼が元來日本固有の精神について非常な興味を持つてゐたことに原因してゐるのであつた。彼は、日本の傳統的繪畫の精神並に價値を認識して、專ら其の方面の研究に沒頭した。狩野派の繪畫は、常に彼の研究の對象であつた。彼の美學的天才と驚くべき熱心とは、數年の間に彼の鑑識を非常に高い處まで進步させた。彼は全く日本畫の傳統に心醉した。漢學思想から發生してゐる當時流行の文人畫は、美術として、彼の眼には全然無價値なるものとしか映じなかつた。彼をして言はしむれば、文人雅客の消閑の玩弄物

に過ぎない文人畫のみが跋扈して、眞の美術たる狩野・土佐・四條以下の諸流が全く世間から閑却されてゐる日本の美術界は、眞に痛嘆すべき情態であつた。彼は慨然として起つた。明治十四年に有志を語らつて鑑畫會を起し、自費を投じて各流の畫家を集め、毎月會を開いて畫論を講じたり、作品の品評をしたりした。又、青年作家に課題を與へて盛に製作をさせた。そしてそれを批判し品隲した。彼の鑑識は次第に斯道の大家を凌ぐに至つた。鑑畫會では諸方の依頼に應じて古畫の鑑定までするやうになつた。狩野永眞は彼に狩野永探といふ名前まで贈つた。

彼は、絶えず刮目して優秀な畫家を物色してゐた。處が、十七年の繪畫共進會に於て、彼は圖らずも狩野芳崖を發見した。芳崖

の繪は二幀とも場内の隅つこにあつた。どちらも粗末な紙本で、表裝さへもしてないから、誰一人立停つて觀る者は無かつた。併しフェノロサは、一見して其の筆法に驚嘆してしまつた。山

蘇武（狩野芳崖筆）

水の圖と云ひ、櫻花に駒の圖と云ひ、筆力が雄健な上に意匠が新しくて、古人の粉本を摸した他の人々の繪とは、全然比較にならな

ない淸新な氣分が畫面の外にまで橫溢してゐた。フェノロサは感激した。彼が待ちに待つてゐた偉大な藝術家が突如として天の一方から出現して來たやうに思つた。そこで、矢も楯もたまらず、早速に芳崖をその家に訪問したのであつた。

フェノロサ

芳崖は、相手の言葉を聞くや否や、苦い顏をしながら「私は何も話す事は無い、折角の御光來だがお斷り申す。」と言つて、にべもなく突つぱねてしまつた。フェノロサは「是非に。」と言つて賴んだ。するど芳崖は癇癪を起して言つた。

「斷然お斷りだ。ちえつ、毛唐人なんかに繪が解つてたまるもんか。」

そんな調子なので、フェノロサも諦めて歸るよりほかはなかつた。芳崖はフェノロサの事を話に聞いても、毛唐人が半可通を振りまはすぐらゐにしか思つてゐなかつた。彼が日本美術の講釋をしたり、狩野永探などと署名して古畫の鑑定などをすると聞いて、片腹痛くもあれば、そんな者を相手にして有難がつてゐる世間の人たちの馬鹿さ加減が腹立たしくてならなかつた。今日は其の毛唐人を追返したので、些か溜飲の下る思ひがあつた。

狩野芳崖

處が、其の翌日になると、又もやフェノロサはやつて來た。おま

狩野友信　畫家　濱町狩野の裔　大正元年歿　年七十

蛇足軒　畫家　號は山雪　狩野山樂の養子　慶安四年(二三一一)歿　年六十三

けに今日は狩野友信の紹介狀を持つて來て、頻に美術談を懇望するのであつた。其の眞面目な熱心な態度が、少しづつ芳崖の感情を柔らげさせた。

「一つ此の毛唐人を試して見よう。」

芳崖はさう考へついたので、日を約して舊藩主毛利侯の邸へフェノロサを連れて行つて、古畫の鑑定をさせて見ることにした。すると、フェノロサの鑑定は一々的中した。最後に女中部屋にあつた屛風繪を取出して見せると、フェノロサは非常に感嘆して眺めた末に、「これは蛇足軒ですね。」と言つた。

「成程、貴下はなか〳〵日本美術がお解りになる。是は話せる。」

芳崖は手を打つて言つた。

芳崖は始めてフェノロサを信用して、問はれるまゝに諸派の長

短などを説明した。其の後もフェノロサは芳崖の陋屋を度々訪問した。そして彼一流の奇拔な畫論を喜んで聽いた。或時フェノロサは言つた。

「現代の日本畫は殆ど滅亡に瀕してゐる。多くの畫家は何れも古人の粉本ばかりを摸してゐるので、私は大いに失望した。其の中で眞個の畫を描いて居られるのは先生一人です。私の觀る所では、二百年このかたの日本畫には見るべきものがまことに少ない。それには他の理由もあるけれど、繪師の職が世襲になつた爲に、唯々舊套を墨守して革新をはかるといふ事をしないのが一番大きな原因だと思ふ。先生はそれほどの手腕を持つて居られながら、何故日本の畫界の爲に振ひ起つて革新をしようとなさらぬのですか。」

勝川院 狩野雅信 木挽町狩野家の第八世 明治十三年歿年五十八

芳崖は憮然として言つた。

「貴下のお言葉は尤もでござる。私も曾て勝川院の門にゐた時分には其の志を抱いてゐましたが、國事多端の際に繪筆を捨て、今では又貧苦と病苦とに交る〴〵惱まされて、到底夙志を成就する事は出來なくなつて了ひました。けれども自分だけの新しい工夫は常に試みてゐます。それについて、近年東京へ來て多くの洋畫を見ました。寫實は洋畫の特長で、日本畫の及ぶ所ではありません。又日本畫では到底洋畫のやうな設色を施すことはできません。けれども、考へて見れば、どちらにしても同じく手でする業です。私も亦人間だ、一本の毛筆で西洋人のする事をして見ようと思ひ立つて、いろいろ苦心しました結果、漸く寫實の方法を完成することが出來ました。又油繪に讓らぬ設色をも完成することが出來ました。が、大體現今の我が國の人は南畫ばかり喜んでゐて、一向私などの繪を顧みようとしません。だから實は餘り畫かないことにしてゐるのです。」

するとフェノロサは大きな聲を立てゝ笑つた。

「先生にも似合はない事を仰せられる。日本人が喜ばないからといつて筆を執らないのは餘り眼界が小さうござる。世界は廣い。五大洲の中に先生の畫を見る者が無いとは申されまい。日本國中に一人も知己が無かつたら、何故國外にそれを求めようとはなさりませぬ。先生の如きは、自分から眼を塞いで、明りが無いと言ふ者の流でせう。」

フェノロサの言葉は大いに芳崖の心を感動させた。けれども、

自分は既に老いてゐる。それは一場の夢に等しい空想に過ぎないのだと思ふと、芳崖は却て寂しい氣持になつた。

「成程、海外に知己を求めよとの貴下の御說は大いに私の意を得ました。私は始めて日本人が盲目ばかりなのを恨まなくなりました。唯私は老い過ぎてゐます。自己本來の面目を發揮しようにも、肝心の勇氣が乏しくなつてしまひました。」

「先生は驚くべき非愛國者でござる。」

とフェノロサは言つた。芳崖は顏色を變へた。

「貴下はけしからん事をおつしやる。私は元來繪師でござるが、曾て國步艱難の際には筆を捨てゝ志士の後に追隨したこともありました。今齡が傾いて、見る影も無い生活をしてはゐますが、一片愛國の精神は胸中から去つたことはござらぬ。

貴下は何でそんな無禮な事をおつしやるのです。」

芳崖は顏に血を漲らせ、瘠せた腕をまくつて語氣鋭く詰寄つた。フェノロサは落着き拂つて、靜かに相手を說いた。

「日本の美術工藝は、一國の利福をはかる無盡藏の寶庫でござる。然るにこれを擲つて顧みないのは愛國者の爲すべき所でない。殊に先生の如き大手腕を有する人が、これを知つてゐながらそれに手を着けないのは、不忠も亦甚だしいことでござる。」

と言つた。芳崖は忽ち膝を打つて感心した。

「よくも貴下は私を敎へて下すつた。私は今まで繪畫が國家の利福に關係を持つてゐるとは氣づきませんでした。貴下の御說のやうならば、この芳崖は斃れるまでは繪筆を離しま

すまい、今後も是非貴下の御指導を仰ぎたうござる。」

「先生に其の御決心がついたのは日本の美術の幸福で、同時に日本國の幸福です。私も及ばずながら微力を盡しませう」。

二人は感激に熱して、固く手を握り合つた。（近世名匠列傳）

高濱虛子　名は清　俳人　小說家　明治七年愛媛縣松山市生

雨月物語　五卷　國文の怪談書　上田秋成著

一三　佛法僧

高濱虛子

「雨月物語」を見た人は、高野山といへば、一番に佛法僧鳥の事を思ひ浮べるであらう。此の鳥は日本國中二三の名山のほか居らぬ鳥で、中にも高野の奥の院に啼くのが特に名高い。弘法大師の詩に、

閑林獨坐草堂曉。三寶之聲聞一鳥。
一鳥有聲人有心。聲心雲水倶了々。

上田秋成　德川時代の文學者　文化七年（二四七〇）歿　年七十八

豐臣秀次　秀吉の異父妹の子　秀吉の養子となり内大臣關白に任ぜられた　文祿三年事によつて高野山に放たれ自刄した

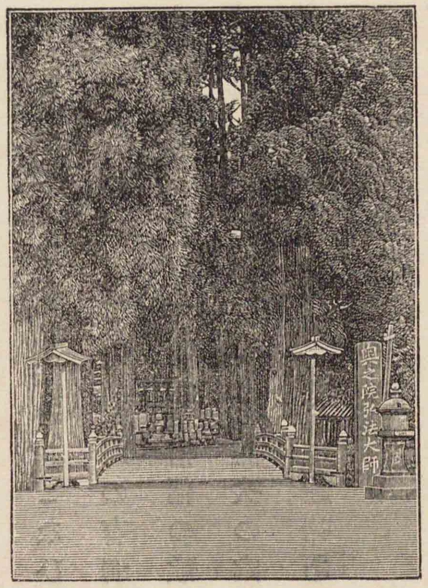
とあるやうに、其の啼聲がぶつぽふそうと聞えるさうで、法の御山にふさはしい靈鳥として特に持囃されてゐる。是に於てか秀吉公の歌といふに、

傳へにし鳥も御法をおこなひの
こゑは高野の有明の月。

とかいふのがある。公卿・僧侶の歌は固より澤山ある。中にも上田秋成は此の鳥に豐臣秀次の幽靈を配して「雨月物語」の一章を作つてゐる。其の物語は趣味ある文字として嘗て愛誦したことがあつた。

「夕飯の濟んだ後、「今夜奥の院に行つて佛法僧の啼聲を聞いて來るから提燈を貸してくれたまへ」と給仕の小僧さんにいふと、「畏まりました」と、小僧さんは笑ひながら膳を下げて行つたが、いく

ら待つても來ない。一時間も經つてから「本當に行くのですか。」と聞きに來る。「勿論本當に行くさ。」と答へると、「途中で何か出ますよ。」といふ。「何が出る。猿でも出るか。」と聞くと、「新墓から幽靈



高野山奥の院

が出ますよ。」といふ。晝間通つて見た時は大名などの舊い墓ばかりが目についたが、成程中には新墓もあらう。「新墓の幽靈位何でもない。」と元氣な事をいつてやる。小僧さんは又薄氣味の惡い、いやな笑ひやうをして降りて行つたが、暫くして二つ巴の紋のついてゐる大きな提燈を持つて來る。さうして、「幽靈の外に野衾も出る

土蜘蛛　能の土蜘蛛によつて仕組んだ芝居で蜘蛛の精を賴光が退治するところ

さうですから、氣をおつけなさい。若し二時間も經つてお歸りが無かつたら、お迎へに行きます。」としやれた事をいふ。小僧さん自身に提燈をつけてくれて、「表門は締めてしまつたから、裏口から御案內しませう。」と先に立つ。此の小僧さんは十六だといふに、馬鹿に脊が低い。それが大きな提燈を提げてゐるので、少なくとも芝居の土蜘蛛に出て來さうな恰好だ。下駄を穿いて臺所の橫にまはる。廣い臺所には一つ燈がともつてゐるばかりだ。暗やみの中に二三人の小僧さんが笑ひながら、我等を見送つてゐる。それが提燈の光で纔かに見える。

がり〳〵〳〵と音がしたのは、お城で見たことのあるやうな岩乘な裏門のくゞり戶を小僧さんが先に立つてあけてくれた時、鐵の鎖の戶に軋る音であつた。小僧さんが突きだす提燈を受

取りながら、友と二人で表に出る。表は暗い。星はあるが纔かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提燈を便りに其の白い土塀に沿うて表通りの奧の院道に出る。門前の數珠屋ももう戸を下してゐる。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩するやうな大木が襖の如く連なつてゐる。其の左右の、襖で立て切つた中に、帶のやうに幅の狹い空が見える。其の空には星が光つてゐる。平生見る星よりは形が大きい。而も其の一帶の星の光では、我等の行手を照らすに足らぬ。我等は提燈の光で纔かに足許を探つて歩く。晝間は氣がつかなかつたが、縱横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は左右に延びるに隨つて隆起して、終に杉の大木に集つてゐる。友は提燈をさし上げて、其

の杉の幹に押しつけるやうにして歩く。友が三間ばかり歩いてもまだ杉の半面を照し盡さぬ。夜の杉は大きさのわからぬ巨人の如く突立つてゐるのである。

寐鳥の立つ音がする。見ると、提燈の上から圓筒の如く圓い光が空中に射出されて、それが高い〳〵杉の梢を彷徨うてゐる。寐鳥が泡を食ふのも尤だ。

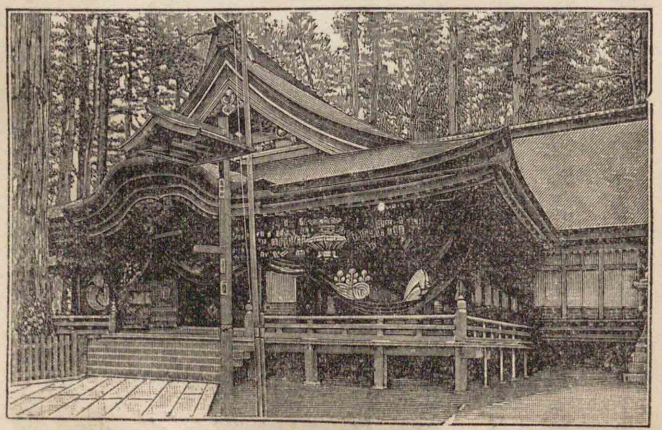
歩きながら友に「雨月物語」の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つともつてゐる。何處やら心細くなる。かういふ時に野衾が道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奧に薄ぼんやり明るいものが見える。何であらうかと氣にしながら行くと、突然木の間に空が見えて、其處に鎌のやうな三日月がかゝつてゐる。

釣狐　狂言の曲の名　一名こんくわい
白藏主　狐を釣る獵師の叔父に當る坊主

向ふからふら〳〵と提燈が一つ來る。急に見えなくなるのは杉の木に隱れるのであらう。すぐまた現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれ違ひ樣によく見ると「釣狐」の狂言に出る白藏主に似てゐる。

行手に燈籠らしい燈が三つともつてゐる。近寄つて見ると御廟の橋だ。友が橋の上から提燈をつり下げて水面を照して見る。玉川の水は火を受けてちら〳〵と流れてゐる。燈籠堂はもうすぐ其處に在る筈だが、眞暗でそれらしいものは見えぬ。怪しみながら近寄つて見ると、すつかり四周の蔀を下して、寂然として寐靜まつてゐるやうだ。數百の燈籠のともり連なつてゐる夜の景色は、寂しくも嚴かであらうと思つて樂みにしてゐたのに、これでは唯眞黑な大きな建物を見るばかりで物足らぬ。

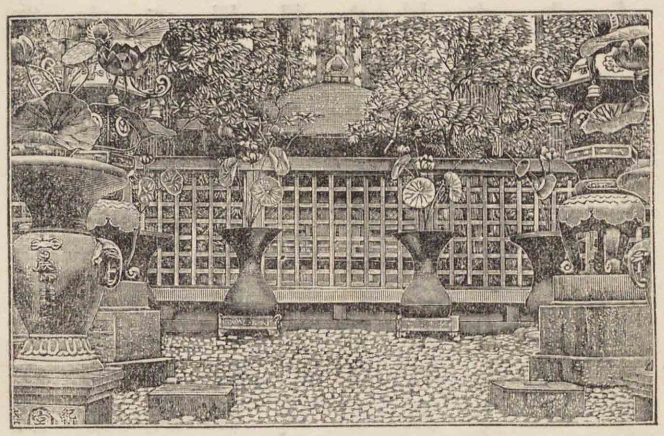
燈籠堂に沿うて御廟の前に出る。御廟の前も眞暗だ。唯廟前に左右六個の小さい釣燈籠がともつてゐる。其の光で纔かに御廟の屋根と二三本の杉と線香立とが見える。此の線香立には、晝間見たときは煙が雲の如く渦巻いて居つた。其の煙の中に數珠をくすべたり、鈴をくすべたりしてゐた信者が今は一人も見當らぬ。人間が居らぬばかりでなく、今は一條の煙も昇つて居らぬ。提燈を其の中に突込んで覗いて見



高野山燈籠堂

ると、冷たくなつた灰の中に線香の燃え滓の赤い紙が四五本殘骸を留めて居るに過ぎぬ。 晝間見た時も大きな線香立だと思つたが、寂然として靜まりかへつたところを見ると、愈々偉大な線香立である。

燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。我等を少し離れて、縁に置かれた提燈の燈が心細さうに瞬いてゐる。 遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。 法隆寺の境内でゝも聞えさうなよい音だ。 方角は御廟の後に當る。 そんな方に寺は



高野山御廟

ない筈だが、不思議だと思ふ。 其の鉦の音に聽きほれてゐると、忽ち近い木の梢でけたゝましい啼聲が起る。 何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帶びた聲だ。 襟元から手を突込んで背なか中を掻きまはされたやうな氣持になる。

鉦の音はまだ聞えてゐる。 鉦の音はよい音だが、今の啼聲は眞平だと思つてゐると、又前よりも一層激しいやつが起る。 或は天狗のやうな嘴をした、鬼のやうな手をしたやつで、忽ち空中から落下し來つて提燈をさらつて行くやうなことはあるまいかと氣になる。 氣のせゐか、提燈の燈は一層心細さうに瞬いてゐる。

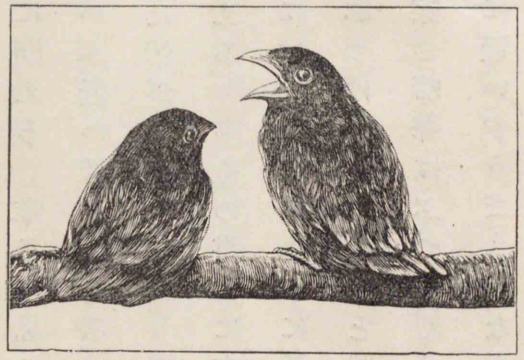
小さい咳拂ひが聞える。 おやと思ふ内に又一つ聞える。 其の邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に一寸した明りが

ある。此處は晝間線香などを賣つてゐた處であるから、すぐに番人の部屋と想像がつく。試に其の傍に行つて、「もし〳〵。」と呼んで見る。「へい。」と返事をする。「一寸伺ひますが、あのおそろしい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか。」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸です。」といふ。「へえ、何といふ獸です。」と聞くと、「野衾といふて、蝙蝠のやうな鼬のやうな、妙な恰好をした獸です。」といふ。あれが野衾かと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つてゐるやうですが、あれは何處ですか。」と聞く。番人は一寸默つてゐたが、「あれは鉦ぢやありません、鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です。」といふ。

鉦の音かと思つてゐたのが鳥の啼聲であつたのは意外であつた。殊にそれを聞かう爲に來た佛法僧であつたのは愈〻意外で

あつた。「あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ暫く無言で二人とも耳を傾けた。やはり、かん〳〵〳〵〳〵と鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますと、かんと響く前に、ぶつといふ低い音が聞える。ぶつと低く響いてから、かんと高い冴えた音が響く。つまりぶつかん、ぶつかんと鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物に文字通り佛法僧と鳴くとあるが、「雨月物語」には佛法といふ字にわざ〳〵「ぶつぱん」と假字が振つてあつて、ぶつぱん、ぶつぱんと鳴くと書いてあつたやうに記憶する。實際の啼聲はぶつかん〳〵と聞えるが、先づ「雨月物語」のぶつぱんに近いやうだ。妙なもので、初めは鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初めて鉦の音と聞いた時も嘗て法隆寺で聞いた金鈴

の響を聯想したが、生き物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に潤のある事に氣がつく。番人が「大概夜中の二時か三時頃にならぬと鳴かんのに、今晩は宵の口から頻に鳴いてゐた。」といふ。さういふ内も絶えずぶつかん／＼と聞える。普通の鳥とは餘程違つてゐる。法の御山の靈鳥として耻かしからぬ不思議の鳥だ。古來幾多の詩歌がこれを持てはやしたのも尤だ。私は嘗て高野の山の靈山である事は奥の院道の杉並木で證據立てられるといつたが、否々杉は物かは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。



佛法僧

見ると、遙か彼方の緣に置かれた提燈の燈も今は靜かにともつてゐる。

番人は寂しい燈籠堂の夜陰に偶、話相手を得たので、問ひもせぬのにいろ／＼話をする。どの話も耳新しく面白かつたが、中にも此の燈籠堂で焚く油は夥しいことで、月に一石から二石の間を往來してゐる。殊に三月二十一日の御影供の時は、一石の油を焚くといふ事や、貧の一燈の燈は信者の所望によつて線香に移してやる、それを北海道や九州あたりまで持つて歸る、中には途中で消えたといふので、大阪あたりから又引返して來る人もあるといふ事などは面白かつた。

ふと氣がつくと、佛法僧は何時の間にやら鳴かぬやうになつてゐた。唯野衾が時々荒膽をひしぐやうな啼聲をする。

歸途に着く。

御廟の橋にかゝつた時、友が「また鳴く。」といふ。

向ふの墓原を縫ふ樣に提燈が一つ來る。 女が三人に男が一人「南無大師遍照金剛」と唱へつゝ水向地藏の前を通る。（十五代將軍）

一四 熊野落

虎の尾を履む　履二虎尾一、不レ咥レ人亨。（易）

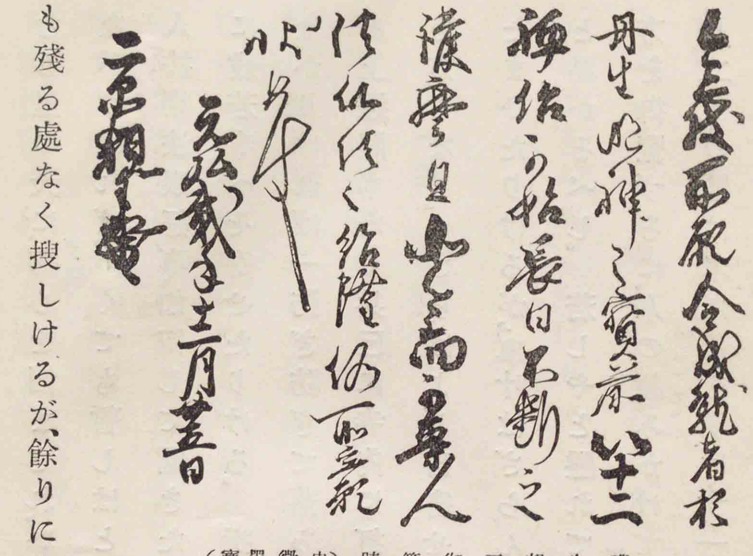
大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞召されんために、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせたまひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しといへども御身を隱さるべき處なし、日月明かなりといへども長夜に迷へるこゝちして、晝は野原の草に隱れて、露に臥す鶉の床に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻に彳みて、人を咎

一乘院　奈良興福寺の寺務門跡

大般若　大般若經六百卷 唐の玄弉三藏の譯したもの

むる里の犬に御心を惱まされ、いづくとても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫しはと思召されける處に、一乘院の候人按察法眼好專、如何して聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄せたりける。 折節、宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせたまふべき樣もなかりける上、透間もなく兵已に寺內に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。「さらばよし、自害せん。」と思召して、既に押肌脫がせたまひたりけるが、「事叶はざらん期に臨んで腹を切らん事はいと易かるべし。 若しやと隱れて見ばや。」と思召し返して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり、二つの櫃は未だ蓋を明けず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して蓋をもせざりけり。 此の蓋を明けたる櫃の中へ御身を縮

筆蹟
今度所令成就者、於丹生明神之寶前、以十二禪侶、可始長日不斷之護摩、且如舊可專人法佛法之紹隆。仍所立願之狀如件
元弘貳年十二月廿五日
二品親王（花押）



護良親王御筆蹟（史徴墨寶）

めて臥させ給ひ、其の上に御經をひきかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。

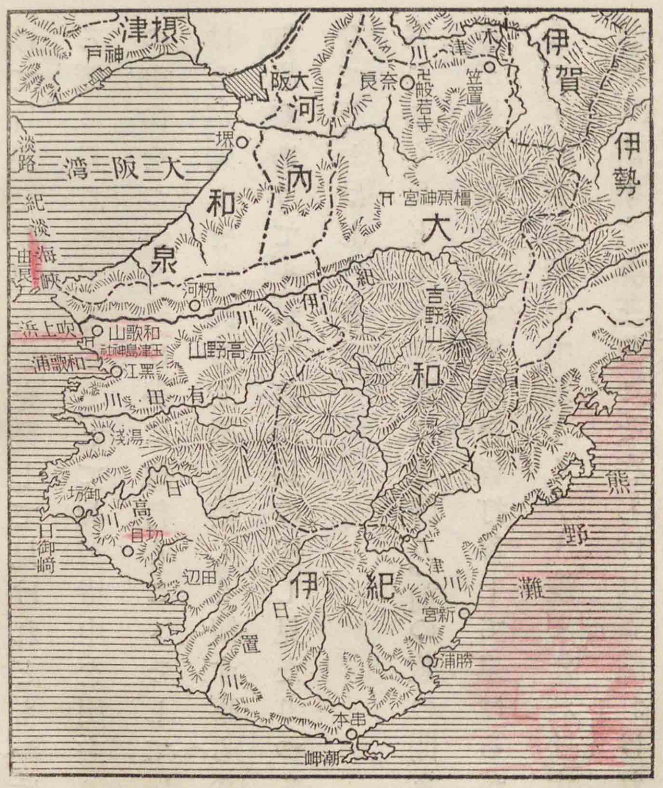
「若し捜し出されなば、やがて突立てん。」と思召して、氷の如くなる刃を拔いて御腹に差當て、兵「こゝにこそ。」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推量るもなほ淺かるべし。

さるほどに、兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも殘る處なく捜しけるが、餘りに求めかねて、「是體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を明けて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを明けて御經を取出し、底を翻して見けれどもおはせず。「蓋明けたる櫃は見るまでもなし。」とて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行くこゝちして猶櫃の中におはしけるが、若しまた兵の立歸り、委しく捜す事もやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の捜し見たりつる櫃に入替らせ給ひてぞおはしける。

案の如く兵ども復佛殿に立歸り、「前の蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし。」とて、御經を皆打移して見けるが、からからと打笑うて、「大般若の櫃の中をよくよく捜したれば、大塔宮は入らせ給はで、大唐の玄弉三藏こそ在しけれ。」と戯れければ、兵皆一同に笑ひて門へぞ出でにける。

「是偏に摩利支天の冥應、又は十六善神

の擁護による命なり。」と、信心肝に銘じ、感涙御袖を沾せり。



熊野附近圖

かくては、南都邊の御隱れがも叶ひ難ければ、卽ち般若寺を御出あつて熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林房玄尊・赤松律師則祐・木寺相模・岡本三河房・武藏房・村上彦四郎・片岡八郎・矢田彦七・

平賀三郎、彼是以上九人なり。宮を始め奉つて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

此の君固より龍樓・鳳闕の內に人とならせ給ひて、華軒・香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々豫ては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮・脚半・草鞋をめして、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むることなかりけり。

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の楫をたえ、浦の濱木綿幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、薄紫や藤代の松に

雨を含める
孤村樹色昏ニ殘雨一、遠寺鐘聲帶ニ夕陽一。（唐の盧綸）

かゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月にみがける玉津島、光も今はさらでだに長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。

其の夜は叢祠の露に御袖を片敷いて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、鬟づら結うたる童子一人來て、「熊野三山の間は、尙も人の心不和にして大義成り難し。是より十津川の方へ御渡り候ひて、時の至らんを御待ち候へかし。兩所權現より案內者につけ進らせられて候へば、御道指南仕るべく候。」と申すと御覽ぜられて、御夢は卽ち覺めにけり。是、

山路
山路元無レ雨、空翠濕ニ人衣一。（唐の王維）

權現の御告なりけりと憑しく思召されければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせたまひける。

其の道のほど三十餘里が間には、絕えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕を敧て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に濁を忍んで朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の靑壁劍に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を經させ給へば、御身も草臥れ果てゝ、流るゝ汗水の如く、御足缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御供の人々も、其の身鐵石にあらざれば、皆飢疲れてはか〴〵しくも步み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に、十津川へぞ着かせ給ひける。（太平記）

野口米次郎　詩人　英詩人　慶應大學教授　歐米に在ること三十餘年ヨネノグチとして知られてゐる　明治八年愛知縣津島町生
四日市　三重縣四日市市　津島から南へ七里

一五　富士の靈

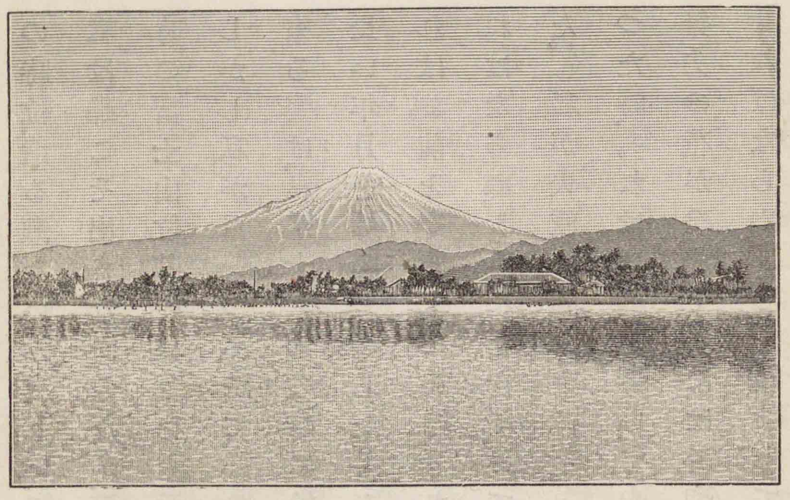
野口米次郎

私は見すぼらしい田舍の一少年として、はじめて船で四日市から東上する朝の海上に富士山を眺めた。あゝ、其の時……寒風肌を劈く二月の朝であつたが、私に對する自然禮讚の幕は切つて落された。私はこの莊嚴無比な神の表象を始めて見て、且畏れ且敬つた。私が若しこの時、富士山から詩の暗示を得なかつたならば、詩人としての私の人生は開かれて居らなかつたかも知れない。私の自然禮讚は富士山で始り、富士山で終つて居る。

實際、詩人の一生は、自然禮讚の四文字に支配される。詩人として、私はいつも第一印象に盡きて居る。自然の現象が、それ〲特殊の姿を見せるのは、始めて接する刹那に於てだ。

私は十六歳の時始めて富士山を見てから今日に至るまで、幾度

四年前　大正九年
觀音崎　横須賀市の東に突出てゐる岬　三浦半島の東端で上總の富津洲と共に東京灣の咽喉を扼してゐる



富士山

富士山の姿を近くから、又遠くから眺めたか知れない。四年前の渡米の際のことだが、船が觀音崎を離れて二三時間もたつと、薄い灰色の暮色が段々と濃くなつて行つた。甲板に立つて見捨てた日本の空を遙かに眺めると、しよんぼり私を見送つて居るものがある……何物か。これこそ、紫色に空をくつきり染抜いた富士山の圓錐體だ。時も時であるが、私は此

の時位、遣る瀨ない、物寂しい、孤獨の感に打たれた事は無かつた。私は聲こそ出さなかつたが、滂沱たる熱い涙を流した。　又この時の富士山位、美の極致を暗示する、世にも尊い姿はなかつた。しかし私が目をつぶつて、心の中に富士山を描く時あらはれて來る姿は、私が十六歲の時に始めて接した富士山である。　私は長い年月を外國で費したものだが、私の勇氣が急に挫けた時、「われはお前を守護してゐる、恐れずに起てよ、起つて大空高く上らねばならぬ。」と私に勢を附けてくれたものは、その富士山であつた。　私が失望の闇の中に落ちて自分の進むべき道を知らなかつた時、「われはお前を導いてやる、道は一筋だ……正義の道には努力の花が咲く、そこには神聖な空氣が滿ちてゐる、お前は復活せねばならぬ。」と私を勵ましてくれたものは、その富士山であつた。「われは階段となつてお前を天に上らせよう。」「われはお前に敎へて神祕の門戶をあけさせよう。」「われはお前を導いて祈禱の殿堂に這入らせよう。」と語つて、私の守護神となつたのは、私が始めて眺めた富士山であつた。　私はその富士山のお蔭で、その富士山の祝福を受けて、少なくとも單純な心と高潔な思想とがどんなものであるかを理解して、詩歌の道を歩むことが出來た。　私はそれを喜び、それに依つて生きて來てゐる。

私はこゝで私の忘れることが出來ない一挿話を語りたい。　時は二十一二年前の冬で、場所は驚くべき霧が鯱か鮫のやうに跳廻るといふ倫敦だ。　私はこの薄氣味惡い、地獄の幾町目かとも思はれる倫敦の市中を、出版者から輕蔑された詩の原稿を後生大事に握りながらうろつき廻つた。　或一夜、詩人ビンヨンに伴

ビンヨン Binyon (1869—) 英國の詩人 著述家

ムーア　英國の詩人　Moore (1853—)　小說家　戲曲家　批評家

北齋　葛飾北齋　江戸末期の浮世畫師　嘉永二年(二五〇九)歿　年九十

なはれて、詩人でもあり又美術家でもあるムーアの招待會へ出掛けた。その晩も私の心は暗かつた、冷たかつた。ビンヨンの言葉で出掛けるには出掛けたが、私は談話する勇氣さへ無かつた。私は私の詩を認めてくれない英國に對して熱烈な反感を持つて居つたのである。ムーアの宅へ着くと、部屋には既に澤山のお客が集つてゐて、談話は岸を打つ海の潮の聲のやうに高まり、部屋の中は倫敦の夜のやうに煙草の煙で濛々として居つた。無名の私は宛も鮠か諸子のやうに客と客との間を寂しく獨りで泳ぎつゝ、我ながら勇氣が無く、日東男子の沽券に關ると思つた時、私はふと部屋の壁の上に懸けてある北齋の富士を見た、……「凱風快晴」の一枚だ。代赭色の圓錐形を堂々と兀立せしめた木版繪だ。私は富士山が語るやうに感じた、「我を見て起て。

凱風快晴（葛飾北齋筆）

東海より
From The Eastern

西洋人を睥睨して東海詩人の面目を發揮せよ。恐れてはならない、慄へてはならない。我はお前に命令する。勇氣を出せ。」私は直に生氣が五體を震動させるやうに感じた。私は直に多辯になつた、私は直に快活になつた。その時から倫敦の滿面は笑ひ始めた、……私の詩集も世に出ることになつた。私は英國文壇に打勝つた。私はどの位、富士山に負ふ所があるか知れぬ。實際、私は富士山の守護で、少なくとも詩人としての人生を開拓して來たといつても過言でない。私が英國での第一詩集「東海より」を富士の靈に捧げたのも、當然私が拂はねばならない敬意の一端を表示したものに外ならぬ。（ヨネ、ノグチ代表詩）

一六　國のしづめ

橘枝直　江戸時代の歌人　天明五年(二四四五)歿　年九十四

橘千蔭　枝直の子　江戸時代の國學者　文化五年(二四六八)歿　年七十五

村田春海　江戸時代の國學者　文化八年(二四七一)歿　年六十六

上田秋成

よろづよの國のしづめのふじのねを
　あふげば、そらにうつしみのかみ。

橘枝直

天のはらてる日の近きふじのねに、
　いまも神代の雪はのこれり。

橘千蔭

はこねぢや神のみさかをこえ來ても、
　なほ富士の嶺は雲居なりけり。

村田春海

こゝろあてに見し白雲はふもとにて、
　おもはぬ空にはるゝふじのね。

賀茂眞淵　江戸時代の國學者　國學四大人の一　明和六年(二四二九)歿　年七十三

荷田春滿　江戸時代の國學者　國學四大人の一　元文元年(二三九六)歿　年六十九

慈圓　天台座主　勅賜慈鎭大師　嘉祿元年(一八八五)寂　年七十一

不二のねに　萬葉集にある富士山を詠んだ歌

賀茂眞淵

するがなる富士の高嶺は、いかづちの
　おとする雲の上にこそあれ。

荷田春滿

聞きしよりも思ひしよりも見しよりも、
　のぼりてたかき山はふじの嶺。

前大僧正慈圓

あまの原富士の煙の春のいろの
　かすみになびくあけぼのゝ空。

讀人不知

不二のねにふりおける雪は、みなづきの
　もちにけぬれば、その夜ふりけり。

落ちゆく勢　安德天皇壽永二年五月維盛等は加賀の篠原で大敗して京に落ちた

木曾殿　源義仲

一七　齋藤別當

落ちゆく勢の中に、武藏國の住人長井ノ齋藤別當實盛は存ずる旨ありければ、赤地の錦の直垂に、萌黄威の鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ、金作の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓持つて、連錢葦毛なる馬に金覆輪の鞍を置いて乘つたりけるが、味方の勢は落ちゆけども、只一騎返し合せ〳〵防ぎ戰ふ。木曾殿の方より手塚ノ太郎進み出で、「あなやさし。如何なる人にて渡らせ給へば、味方の御勢は皆落ちゆき候に、只一騎殘らせ給ひたるこそ優に覺え候へ。名のらせ給へ。」と詞をかけゝれば、「先づかういふわ殿は誰そ。」「信濃ノ國の住人手塚ノ太郎金刺ノ光盛。」とこそ名のりたれ。齋藤別當、「さては互によい敵。但しわ殿を下ぐるにはあらず。存ずる旨があれば、名乘ることはあるまじいぞ。寄れ、組まう、手塚。」とて、馳せならぶる處に、手塚が郎等、主を討たせじと中に隔り、齋藤別當に押並べてむずと組む。齋藤別當「あつぱれ、おのれは日本一の剛の者と組んでうずよ、なうれ。」とて、わが乘つたりける鞍の前輪に押しつけて、ちつともはたらかさず、首かき切つて捨てゝんげる。手塚ノ太郎、郎等が討たるゝを見て、弓手に廻り合ひ、鎧の草摺引上げて、二刀刺し、弱る所を組んで伏す。齋藤別當、心は猛う思へども、軍にはし疲れぬ、手は負ひつ、その上老武者ではあり、手塚が下にぞなりにける。手塚ノ太郎、馳せ來る郎等に首とらせ、木曾殿の御前に參り、畏つて、「光盛こそ奇異の癖者と組んで、討つて參つて候へ。侍かと見候へば、錦の直垂を着て候。又大將軍かと見候へば、續く勢も候はず。名のれ〳〵と攻め候ひつれども、遂に名のり候はず。聲は

坂東聲にて候ひつる。」と申しければ、木曾殿「あつぱれ是は齋藤別當にてあるごさんなれ。それならんには、義仲が上野へ越えたりし時、幼目に見しかば、白髮の糟生なつしぞかし。今は早七十にも餘り、白髮にこそなりぬらんに、鬢・鬚の黒いこそ怪しけれ。樋口次郎兼光は、年比馴遊びて見知つたるらん。樋口召せ。」とて召されけり。

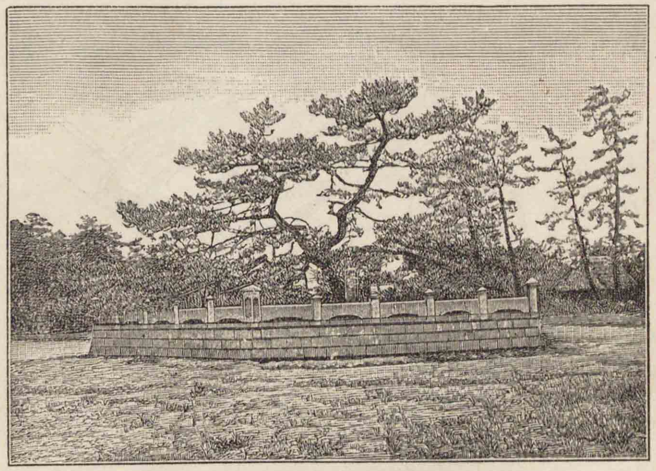
樋口次郎たゞ一目見て、「あな無慚、齋藤別當にて候ひけり。」とて涙を流す。木曾殿「それならんには、はや七十にも餘り、白髮にこそなりぬらんに、鬢・鬚の黒いはいかに。」と宣へば、やゝあつて、樋口次郎涙を抑へて申しけるは、「さ候へば、その樣を申し上げんと仕り候が、餘りにあはれに覺え候ひて、先づ不覺の涙のこぼれ候ひけるぞや。されば弓矢取は、聊かの所にても、思出の詞をばかねてつかひ置くべき事にて候ひけるぞや。齋藤別當常は兼光にあひて物語し候ひしは、『六十に餘りて軍の陣へ向はん時は、鬢・鬚を黒う染めて若やがうと思ふなり。その故は、若殿原に爭ひて先をかけんもおとなげなし。又老武者とて人の侮らんも口惜しかるべし。』と申し候ひしが、誠に染めて候ひけるぞや。洗はせて御覽候へ。」と申しければ木曾殿「さもあらん。」とて、洗はせて御覽ずれば、白髮にこそなりにけれ。

齋藤實盛（前賢故實）

大臣殿　内大臣平宗盛

故鄕へは　「君不レ見買臣衣レ錦還二故鄕一、五十身榮未レ爲レ晚。」（唐の白樂天）

又齋藤別當錦の直垂を着けることも、最後の暇申しに大臣殿へ參つて、『かう申せば、實盛が身一つにては候はねども、先年坂東へ罷り下り候ひし時、水鳥の羽音に驚き、矢一つをだに射ずして、駿河の蒲原より逃上つて候ひしこと、老の後の恥辱、たゞこの事に候。今度北國へ罷り下り候はゞ、定めて討死仕り候べし。實盛もとは越前國の者にて候ひしが、近年御領につけられて、武藏國長井に居住仕り候ひき。事のたとへの候ぞかし『故鄕へは錦を着て歸る。』と



實盛塚（石川縣江沼郡篠原村）

朱買臣　漢の武帝の時の人四十餘歳で始めて仕官しやがて鄕里なる會稽の太守に拜せられた折「上謂曰、富貴不レ歸二故鄕一、如二衣レ繡夜行一。今子如何。買臣頓首。」と漢書に見えてゐる。

山路愛山　名は彌吉　評論家　靜岡縣生　大正六年歿　年五十四

神護景雲三年　稱德天皇の御代（一四二九）

申すことの候へば、なにか苦しう候べき、錦の直垂を御免候へかし。』と申しければ、大臣殿、『やさしうも申したりけるものかな。』とて、錦の直垂を御免ありけるとぞ聞えし。昔の朱買臣は、錦の袂を會稽山にひるがへし、今の齋藤別當實盛は、その名を北國のちまたに揚ぐとかや。朽ちもせぬ、空しき名のみ留めおきて、屍は越路の末の塵となるこそあはれなれ。（平家物語）

一八　武士道

山路愛山

神護景雲三年、朝廷警衛のため東人を召させ給ひし時の詔に、『東人は、常に『額に箭は立つとも、背には立てじ。』といひて、君を一心に護るものぞ。』とあり。東國は蝦夷と境を接して、民族の生存競爭劇しく、戰爭なども多かりしゆゑ、自ら健氣なる風をも養成した

石橋山　相模國小田原町の西方にある山　治承四年源頼朝は大庭景親と此處で戰つて敗れた

るならん。蝦夷の叛亂聞えずなりし後も、天慶以來、幾度か干戈動き、大名・小名の私闘も亦少なからず。人氣自ら上國に異なり。かくて武士道といふものもこの間に成長したり。

武士道とは如何なるものぞや。一定の釋義を下すはむづかしきことなれども、まづは武士間に行はれたる面目律とも云ふべきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は、臆病といふ事なり。頼朝は石橋山の厄難の時、日頃髻の中に隱しおきたる觀音の像を取出し、「我が首、若し大庭等の手に渡らん時、髻中に此の本尊のあるを見ば、源氏の大將の所爲に似ずとて嘲らるべし。それが口惜しければ、かくは取出し奉るものなり。」と云へり。崇德上皇、爲義を白河殿に召させ給ひし時、爲義、昨夜の凶夢を陳べて、御味方たるべき仰辭退せんとしたるに、使の殿上人、「武

義平　源義朝の長子　平治元年(一一一九)歿　年二十

將の身として、夢見・物忌などは餘りに後れたる沙汰なり。」といはれしかば、爲義「實にも。」とて參殿に及びたり。

宗旨も信仰も武士に取つては日常の事なり。一旦非常に臨んでは、唯何事も惑はず突進するが、武士道の極意なり。されば保元の亂に、重盛は「勅命を蒙つて罷り向ひたるものが、敵陣強しとて引返すべきやうやある。」といきまき、平治の亂に、義朝は義平の敗軍を見て、「義平が河より西へ引きつるは、家の疵とおぼゆるぞ。今は何をか期すべき、討死せんのみ。」と云ひて敵陣に馳突したり。

臆病は弓矢の疵となるべきものなれば、寧ろ死すとも卑怯の振舞すべからずとは、武士道の第一義にして、神護景雲の詔に、「額に箭は立つとも、背には立てじ。」とあるものと同意なり。如何なる場合にも、逃げたりなど云はれんは口惜し。「侍程の者が一度申

さじと思ひ切りしことを、たとひ拷問せられたればとて申すべきやうなし。」と云ふがごとく、何事も思ひ切つて、惡びれぬを武士の魂とす。

次に、其の頃の武士道にて宗と重んじたるは、志の專一なることなり。尤も、「大名は草の靡き。」といふ諺は其の頃よりあり。强さうなる方に荷擔して、所領安堵を求むるは一般の習なりしかども、さりとて輿論はかく意氣地なきを善しとせしには非ず。主從の義を重んじ、志を主家に盡すを以て眞の武士の面目とし、殊に主家の盛衰に從つて向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に從ふ武士は、「源氏に二人の主取ることなければ、宣旨なりとて、えこそ內裏へは參るまじけれ。」と云ひしものもあり。「源氏の習、心がはりやあるべき。」とて肩を怒らしゝものもあり。「凡そ武士には二心を恥とす。殊に源氏の習は左樣に候。」と力みしものもあり。平家に從ふ武士も、忠盛の家の子には、「主君若し辱しめられたらんには、えこそ遠慮はすまじけれ。必ず殿上までも斬入らん。」と決心したるものもあり。平宗清は賴朝の恩人にて、賴朝より「關東に來らば善く扶持せん。」と言送りたれども、「平家零落の後、賴朝に參向する一條、尤も恥ぢ存じ候。」と云ひ、直ちに屋島の內府に參り、運命を主家と共にしたり。齋藤別當實盛は「吉についてあなたへ參り、こなたへ參らんは見苦し。今は源氏の世盛となりたりとも、我は平家の味方となりて討死せん。」とて、黑く染めたる白髮首を木曾義仲の士に取らせたり。かく臆病を惡み、主人に忠志の專一ならんことを宗としたる武士道が、其の結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東

屋島の內府
內大臣平宗盛
治承三年(一八四五)薨
年三十九

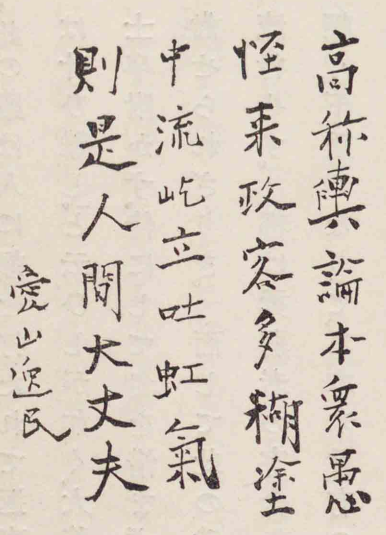
吾妻鏡 鎌倉幕府の日記
池禪尼 平清盛の繼母

國武士が平家を西海に討ちし時、「病身ながら天下の重事なり。坐視すべきに非ず。とても死ぬる身ならば戰場に死なん。」とて出陣したる者のことは、吾妻鏡にも見えたり。「事あらば眞先かけて命を主君に奉らん。弓矢執る身は、死すべき處を遁れぬれば、中々最期の恥あるなり。」とて、腹掻切つて死したるは、其の頃の武士の習なれば、義朝も「合戰の場に罷り出でて何ぞ生命を存ぜん。」といへり。されば賴朝が十四歲にして父擊たると聞きながら、自害をもせず、池禪尼にすがりて、かひなき生命を助りしを、時の人は善くも言はざりしなり。

此の外、其の頃の武士道にて殊に著しき一箇條は、人々互に功名を競ひたることなり。爲朝が白河殿にて、「我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬやうに、たゞ一人いかにも強

筆蹟
偶感
高稱二輿論一本衆愚、怪來政客多二糊塗一。中流屹立吐二虹氣一、則是人間大丈夫。
愛山逸民

からん方へ差向け給へ。敵たとひ千騎もあり、萬騎もありとも、一方は射拂はんずるなり。」と廣言したるは、最も善く武士の氣習



山路愛山筆蹟

を言ひあらはしたるものにて、佐々木・梶原の宇治川先陣なども其の一例なり。

但し弓矢の道と云ひ、武士の道と云ふもの、畢竟自然に生じたる武士の面目律にて、多くは無意識の間に發達したるものなれば、此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、明かに區別を立て得べきものに非ず。さりとて其の面目律の制裁は、賴朝時代にても中々嚴

重にして、武士道に外れたるものは、武士の間には生きて居られぬ程なりき。たとへば、平治の亂に、源氏の士、藤原信頼を見限り、「此の殿は、人に頬を打たれて返事をだにしたまはねば、侍の主には叶ひ難し。」と云ひしが如く、大將にして武士道の心得なければ、士卒附かず、侍にして名を惜まず卑怯の振舞あらば、武士の間に齒せられざりき。而して此の武士道は東國に盛にして都には流行せず。都は柔弱者の寄合なりしが故に、天下の勢つひに上輕く下重くなりて、日本未曾有の大改革とはなりたるなり。さりながら東國の武士が天下の主人となりたるは、獨り武士道の盛なりしが爲に非ず。保元以來、都に兵事多く、京洛の客往々四方に散じ、天下經營の知識に東國の武力を合併したるが故なり。近き世の薩摩の事も之に似たり。薩藩は武道の盛なる處にして、百二都城の健兒は勇氣に於て天下無比なりしかども、それだけにては天下に功を立つることもならざりしに、島津齊彬の祖父重豪、隱居して榮翁と稱せし人、薩摩の邊土にて武士の片意地なることを憂へ、天下の形勢をも知らしめんとし、勉めて上國の風を移しゝより、薩藩固有の武士氣質と上國の知識とは此に相合して、薩人始めて眼を天下に開くに至れるなり。東國の強きのみにては、なほ天下を圖り難し。賴朝は北條・三浦・千葉・小山など云ふ東國武士の力を假りたると共に、大江廣元・三好康信など云ふ京洛の客を愛し、其の經綸の知識を用ひたるなり。武士道も開化せざれば唯強きのみ。天下の形勢を辨へ知る知識と武士道との二味が調合して、始めて役に立ちしなり。

（愛山文集）

島津齊彬　鹿兒島藩主　安政五年（二五一八）薨
北條　四郎時政　建保三年（一八七五）卒　年七十八
三浦　大介義明　治承二年（一八四〇）歿　年八十九
千葉　介常胤　建久元年（一八五〇）歿　年四十八
小山　小四郎朝政　曆仁元年（一八九八）歿　年八十四
大江廣元　公文所別當　嘉祿元年（一八八五）卒　年七十八
三好康信　問注所執事　承久三年（一八八一）卒　年八十二

乃木希典　陸軍大將　學習院長　伯爵　大正元年九月薨　年六十四

兩典　長男勝典　次男保典

一九　遺言狀

乃木希典

第一　自分此度御跡を追ひ奉り自殺候段、恐入候儀、其罪は不輕存候。然る處、明治十年の役に於て軍旗を失ひ、其後死處を得度心掛候も其機を得ず、皇恩の厚きに浴し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰、最早御役に立ち候時も餘日なく候折柄、此度の御大變、何共恐入候次第、玆に覺悟相定め候事に候。

第二　兩典戰死の後は先輩諸氏・親友諸彥よりも毎々懇諭有之候へども、養子の弊害は古來議論有之、目前乃木・大見の如き例他にも尠からず、特に華族の御優遇相蒙り居り、實子ならば致方も無之候へども、却て汚名を殘す樣の憂これなき爲、天理に背きたる事は致すまじき事に候。祖先の墳墓の守護は血

新坂邸　赤坂區新坂町にある乃木大將の邸宅

靜子　乃木大將夫人

塚田大佐　陸軍步兵大佐塚田淸市

松井　學習院敎授主事松井安三郞

猪谷　學習院敎授學生監猪谷不美男

緣有之限は其者共の氣を附け申すべき事に候、乃ち新坂邸は其爲區又は市に寄附し可然方法賴度候。

第三　資財分與の儀は別紙の通相認置候。其他は靜子より相談可仕候。

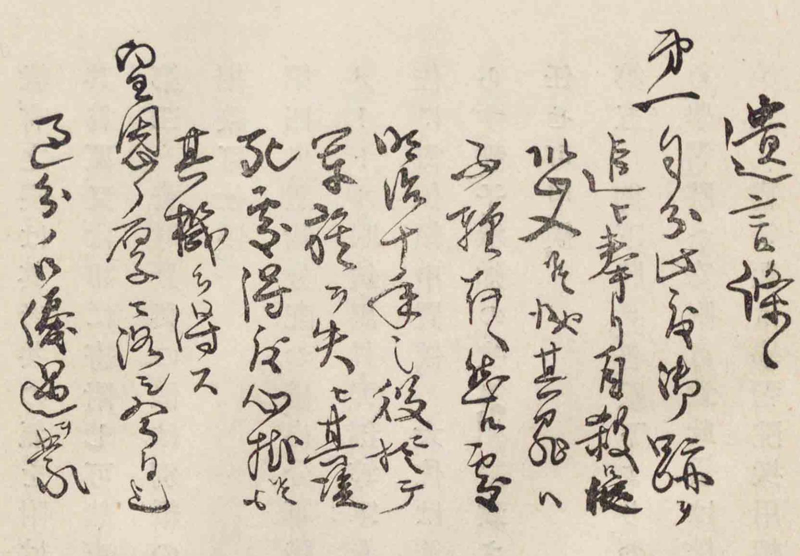
第四　遺物分配の儀、自分軍職上の副官たりし諸氏へは、時計・メートル・眼鏡・馬具・刀劍等軍人用品の內にて見計の儀、塚田大佐に御依賴申置候。大佐は前後兩度の戰役にも盡力尠なからず、靜子承知の次第相談致さるべく候。其他は皆の相談に任せ可申候。

第五　御下賜品(各殿下よりの分も)、御紋付の諸品は悉皆取纏め、學習院へ寄附可致、此儀は松井・猪谷兩氏へも御賴仕置候。

第六　書籍類は學習院採用相成候分は成るべく寄附、其餘は

長府　山口縣豐浦郡長府町　大將の出生地

遊就館　東京九段坂上靖國神社の境内にある武器陳列所



乃木希典

長府圖書館へ同斷、不用の分は兎も角もに候。

第七　父君・祖父・曾祖父君の遺書類は乃木家の歷史とも云ふべきものなるゆゑ、嚴に取纏め、眞に不用の分を除き、佐々木侯爵家又は佐々木神社へ永久無限に御預申度候。

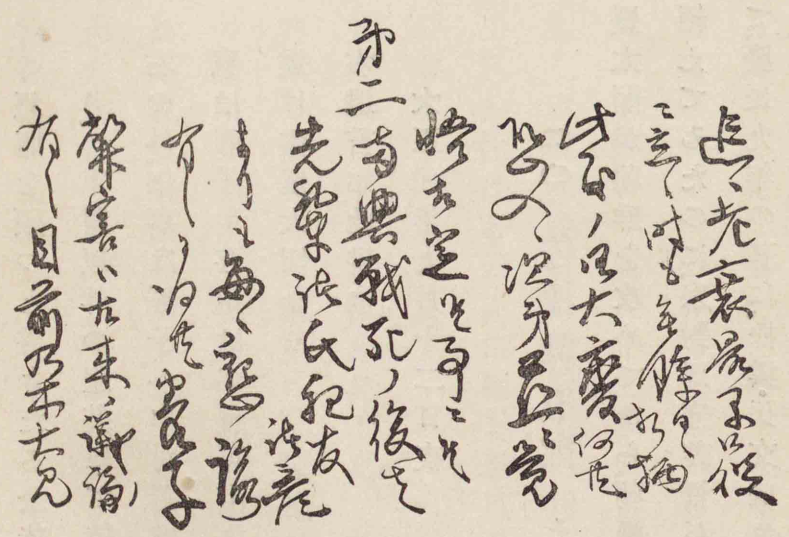
第八　遊就館への出品は其儘寄附致可申、乃木の家の記念には保存此上なき良法に候。

石林　栃木縣那須野の字　乃木大將退耕の處

集作　乃木集作　大將の弟

中野　東京市外

石黒男爵　今は子爵　名は忠悳　陸軍々醫總監　樞密顧問官



遺言狀

第九　靜子儀追々老境に入り、石林は不便の地、病氣等の節心細しとの儀、尤もに存候。右は集作に讓り、中野の家に住居然るべく、同意候。中野の地所家屋は靜子其時の考に任せ候。

第十　此方屍骸の儀は石黒男爵へ相願置候間、可然醫學校へ寄附可致、墓下には毛髮・爪・齒（義齒共）を入れて十分に候。（靜子承知）

恩賜を頒つと書きたる金時計は玉木正之に遣はし候筈なり。　軍服以外の服裝にて持つを禁じ度候。

右の外、細事は靜子へ申付置候間御相談被下度候。　伯爵乃木家は靜子生存中は名義可有之候へども、呉々も斷絶の目的を遂げ候儀大切なり。

右遺言如此候也。

大正元年九月十二日夜　希典

二〇　佐橋甚五郎　その一

森林太郎

豐太閤が朝鮮を攻めてから、朝鮮と日本との間には往來が全く絕えてゐたのに、宗對馬守義智が德川家の旨を承けて肝煎をして、慶長九年の暮に、松雲・孫文彧・金孝舜と云ふ三人の僧が朝鮮か

玉木正之　陸軍步兵少佐
森林太郎　號は鷗外　醫學者　文學者　醫學博士　文學博士　陸軍々醫總監　東京帝室博物館總長　石見津和野藩生　大正十一年薨　年六十一
宗對馬守義智　對馬國府中城主　秀吉家康等の命を受け常に朝鮮との交涉に當つてゐた　元和元年(二二七五)卒　年四十八
慶長九年　後陽成天皇の御代　德川初代の將軍家康の時(二二六四)

ら樣子を見に來た。　德川家康は三人を紫野の大德寺に泊らせて置いて、翌年の春秀忠と一緒に上洛した時に目見えをさせた。中一年置いて、慶長十二年四月に、朝鮮から始めての使が來た。もう家康は駿府に隱居して居たので、京都に着いた使は、最初に江戶へ往けと云ふ指圖を受けた。　使は閏四月二十四日に江戶の本誓寺に着いた。

五月六日に將軍に謁見した。　十四日に江戶を立つて、十九日に興津の清見寺に着いた。　家康は翌二十日の午の刻に使を駿府の城に召した。　使は一應老中本多上野介正純の邸に入つて、そこで衣服を改めて登城することになつた。　此の度の使は通政大夫呂祐吉・通訓大夫慶暹・同丁好寛の三人である。　本國から乘物を三つ吊らせて來た。　呂祐吉の乘物には造花を持たせた人

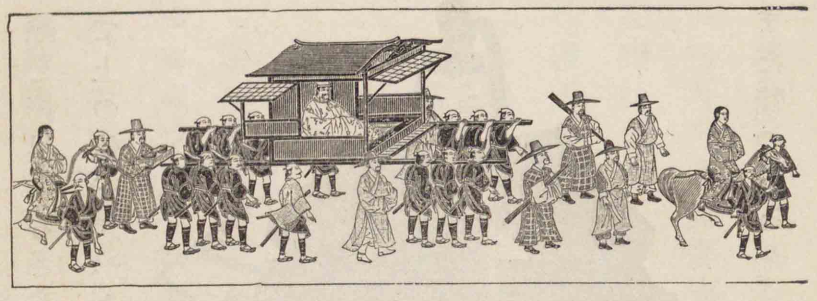
紫野　京都市の北部
大德寺　臨濟宗大德寺派の本山
上洛　この時家康は將軍を辭して秀忠がその後を繼いでゐた
本誓寺　東京市深川區仲大工町にある淨土宗の寺　京都知恩院の末寺
興津　靜岡縣清水市の東北に接する町
本多上野介正純　正信の子　下野宇都宮城主　後罪を得て出羽に流された　寛永十四年(二二九七)卒　年七十三

李昖　宣祖　秀吉征韓の時の朝鮮王

朝鮮使節の行列

形が座の右に据ゑてあつた。捧げて來た朝鮮王李昖の國書は江戸へ差出した。次は上々官金僉知・朴僉知・喬僉知の三人で、これは長崎で造らせた白木の乘物に乘つてゐた。次は上官二十六人、中官八十四人、下官百五十四人、總人數二百六十九人であつた。道中の驛々では鞍置馬百五十疋、小荷駄馬二百餘疋、人足二百餘人を繼ぎ立てた。駿府の城ではお目見えをする前に、先づ獻上物が廣緣に並べられた。人參六十斤、白苧布三十疋、蜜百斤、蜜蠟百斤の四色である。江戸の將軍家への進物十一色に比べると、

暈繝　縞と縞との間をくまどつて織つた織物



（東京帝國大學史料編纂所藏）

はるかに略儀になつてゐる。固より江戸と駿府とに分けて進上するといふ初からの仕組では無かつたので、急に拔差をして調へたものであらう。江戸で出した國書の別幅に十一色の目錄があつたが、本書とは墨色が相違してゐたさうである。

此の日に、家康は翠色の裝束をして、上壇に疊を二疊敷かせた上に、暈繝(うんげん)の錦の茵を重ねて着座した。使は下段に進んで、二度半の拜をして、右から左へ三人並んだ。上々官金僉知・朴僉知・喬僉知の三人はいづれも廣緣に並んで拜をした。こゝでは別に書

大御所　徳川家康

類を捧呈することなどは無い。茶も酒も出されない。暫くして上の使三人がまた二度半の拜をすると、上々官三人も緣でまた拜をした。

徳　川　家　康（狩野探幽筆）

上々官の拜が濟んでから、上の使三人は上々官を隨へて退出した。家康は六人の朝鮮人の後影を見送つて、すぐに左右を顧みて言つた。

「あの緣にゐた三人目の男を見知つたものは無いか。」

側には本多正純を始として、十餘人の近臣がゐた。案内して來た宗もまだ殘つてゐた。併し意味ありげな大御所の詞を聞いて、皆暫

天正十一年　正親町天皇の御代(二二四三)

府中　駿府　今の靜岡市

く詞を出さずにゐた。稍〻あつて、宗が危ぶみながら口を開いた。

「三人目は喬僉知と申しまするもので。」

家康は宗を冷かに一目見たきりで、目を轉じて一座を見渡した。

「誰も覺えてはをらぬか。わしは六十六になるが、まだめつたに目くらがしは食はぬ。あれは天正十一年に濱松を逐電した時二十三歳であつたから、今年は四十七になつてをる。太い奴、ようも朝鮮人になりすましをつた。あれは佐橋甚五郎ぢやぞ。」

一座は互に目を合はせたが、今度は暫くの間誰一人詞を出す者が無かつた。本多は何か問ひたげに大御所の氣色を伺つてゐた。家康は本多を顧みて、「もうよい、振舞の事を賴むぞ。」と言つた。

これは家康がこの府中の城に住むことに極めて沙汰をしたの

が今年の正月二十五日で、城はまだ普請中であるので、朝鮮の使の饗應を本多が邸ですることに言附けて置いたからである。

「一應取糺して見ることにいたしませうか。」

と、本多はやはり氣色を伺ひながら言つた。

「いや。それは知らぬといふぢやらう。上役のものは全く知らぬかも知れぬ。とにかく、あの者どもは早くこゝを立たせるがよい。土地のものと文通などを致させぬやうにせい。」

「はつ。」と言つて本多は忙しげに退出した。

饗應の用意はかねて調へてあつた。使は本多の邸へ引取つて常の衣服に着換へた上で、振舞を受けることになつてゐたのである。城内から歸つた本多は、丁度着換が濟んで休息してゐる呂祐吉に、宗を以てそれとなく問はせた。「けふお目見えをした

藤枝 静岡の西凡そ五里 静岡縣志太郡藤枝町

者の中に、大御所のお見知になつてゐる人はなかつたか。」と問はせたのである。通事の取次いだ返答は、「一向に存ぜぬ。」といふ事であつた。しかも、さう言つた呂祐吉の顏は、いかにも思ひ掛けぬ事を問はれたらしく、どうも物を包み隱してゐるものとは見えなかつた。饗應に相伴などはなかつた。膳部を引く頃に、大御所のお使が出向いて來て、上の三人に具足三領、太刀三振、白銀三百枚、次の三人金僉知等に刀三腰、白銀百五十枚、上官二十六人に白銀二百枚、中官以下に鳥目五百貫を引物として贈つた。

本多の指圖で、使の一行は其の日の内に立つて、藤枝まで上つた。京都紫野に着いたのが五月二十九日、大阪を出たのが六月八日で、大阪で船に乘込んだのが六月十一日である。朝鮮征伐の時の俘虜の男女千三百四十餘人も、江戸からの沙汰で一緒に船に

信康　母は今川氏　天正七年(二二三九)事によつて切腹　年二十一

載せて還された。

濱松の城が出來て、當時三河守と名乘つた家康はそれに這入つて、嫡子信康を自分のこれまでゐた岡崎の城に住はせた。そこで信康は岡崎二郎三郎と名乘ることになつた。この岡崎殿が十八歳ばかりの時、主人より年の二つ程若い小姓に佐橋甚五郎といふものがあつた。口に出して言附けられぬうちに、何の用事でも果すやうな、敏捷な若者で、武藝は同じ年頃の同輩に、傍へ寄附く者もない程であつた。それに遊藝が巧者で、殊に笛を上手に吹いた。或時信康は物詣に往つた歸りに、城下のはづれを通つた。丁度春の初で、水のぬるみ初めた頃である。とある廣い沼の遙か向ふに、鷺が一羽おりてゐた。銀色に光る水が一筋

うねつてゐる側の黒ずんだ土の上に、鷺は綿を一撮み投げたやうに見えてゐる。ふと小姓の一人が、「あれが撃てるだらうか。」と言ひだしたが、衆議は「所詮撃てぬ。」といふことにきまつた。甚五郎は最初默つて聞いてゐたが、皆が撃てぬと言ひきつた跡で、獨語のやうに、「なに、撃てぬにも限らぬ。」とつぶやいた。それを蜂谷といふ小姓が聞咎めて、「おぬし一人がさう思ふなら、撃つて見るがよい。」と言つた。「隨分撃つて見てもよいが、何か賭けるか。」と甚五郎が言ふと、蜂谷が「今こゝに持つてゐる物をなんでも賭けよう。」と言つた。「よし、そんなら撃つて見る。」と言つて、甚五郎は信康の前に出て許を請うた。信康は興ある事と思つて、足輕に持たせてゐた鐵砲を取寄せて甚五郎に渡した。「中るも中らぬも運ぢや。はづれたら笑ふまいぞ。」甚五郎はかう言つて置いて、少

しもためらはずに撃ち放した。上下擧つて息を屏めて見てゐた。鷺は羽を擴げて飛立ちさうに見えたが、其の儘黒ずんだ土の上に、綿一撮み程の白い形をして殘つた。信康を始として、一同覺えず聲を揚げて譽めた。田舟を借りて鷺を取りに行く足輕を後に殘して、一同は館へ歸つた。

二一　佐橋甚五郎　その二

翌日の朝思ひ掛けぬ出來事が城内の人々を驚かした。それは小姓蜂谷が、體中に疵も無いのに死んでゐて、甚五郎は行方が知れなくなつたのである。小姓の一人は鷺を撃つた後で、お供をして歸る時、甚五郎が蜂谷に「約束の事は後で談合するぞ。」と言ふのを聞いた。死んだ蜂谷の身のまはりを調べた役人は、かねて見知つてゐる蜂谷の金熨斗附の大小の代りに、甚五郎の物らしい大小の置いてあるのに氣が附いた。その外にはこの奇怪な出來事を判斷する種になりさうな事は格別無い。只小姓たちの言ふのを聞けば、蜂谷は今度紛失した大小を、平生「由緒のある品だ。」と言つて、大切にしてゐたさうである。又其の大小を甚五郎が不斷褒めてゐたさうである。

甚五郎の行方は久しく知れずにゐて、たうとう蜂谷の一周忌も過ぎた。或日甚五郎の從兄佐橋源太夫が濱松の館に出頭して歎願した。それは、遠くも無い田舍に、甚五郎が隱れてゐるのが知れたので、助命を願ひに出たのである。源太夫はかういふ話をした。甚五郎は鷺を撃つとき蜂谷と賭をした。蜂谷は「身に着けてゐる物を何なりとも賭けよう。」と言つた。甚五郎は運好

く鷲を擊つたので、不斷望を掛けてゐた蜂谷の大小を貰はうと言つた。それも只貰ふのでは無い、代りに自分の大小を遣らうといふのである。併し蜂谷は、「この金熨斗附の大小は蜂谷家で由緒のある品だから遣らぬ。」と言つた。甚五郎は聽かなんだ。「武士は誓言をしたからは、一命をも棄てる。よしや由緒があらうとも、おぬしの身に着けてゐる物の中で、わしが望むものは大小ばかりぢや、是非くれい。」と言つた。「いや、さうはならぬ。命ならいかにも棄てう。家の重寶は命にも換へられぬ。」と蜂谷は言つた。「誓言を反古にする犬侍奴。」と甚五郎が罵ると、蜂谷は怒つて刀を拔かうとした。甚五郎は當身を食はせた。それきり蜂谷は息を吹返さなかつた。平生何事か言ひだすと後へ引かぬ甚五郎は、たうとう蜂谷の大小を取つて、自分の大小を代りに殘

して立退いたといふのである。源太夫は家康にこの話をして、「何を言ふにも年若の甚五郎であるから、上の思召で助命して戴ければよし、若し叶はぬ事なら、人手に掛けず打果してお詫をしたい。」と言つた。

家康はこれを聞いて、暫く考へて言つた。

「そちが話を聞けば、甚五郎の申分や所行も一應道理らしく聞えるが、所詮は間違うてをるぞよ。併しそちも言ふ通り、弱年の者ぢやから、何か一廉の奉公をいたしたら、それをしほに助命いたして遣はさう。」

「はつ。」と言つて、源太夫は姑く疊に額を押當てゝゐた。やゝあつて淚ぐんだ目を擧げて家康を見て、「甚五郎奴に致させまする御奉公は。」と問うた。「甚五郎は怜悧な若者で、武藝にも長けてゐる

甘利　甘利四郎三郎

武田勝頼　信玄の子　天正十一年(二二四二)戰死　年三十七

さうな。手に合ふなら、甘利を討たせい。」かう言ひ放つた儘、家康は座を起つた。

望月の夜である。甲斐の武田勝頼が甘利四郎三郎を城番に籠めた遠江國榛原郡小山の城で、月見の宴が催されてゐる。大兵肥滿の甘利は大盃を續けざまに乾して、若侍どもにさまざまの藝をさせてゐる。

「三河の水の勢も
小山が堰けばつい折れる。
凄まじいのは音ばかり。」

こんな歌を歌つて一座はどよめく。その內夜が更けたので、甘利は大勢に暇を遣つて、後には新參の若衆一人を留めて置いた。

「あゝ、騷がしい奴等であつたぞ。月の面白さはこれからぢや。又笛でも吹いて聞かせい。」

かう言つて、甘利はその場で橫になつた。若衆は笛を吹く。いつも不意に所望せられるので、身を放さずに持つてゐる笛である。夜は次第に更けて行く。燃えさがつた蠟燭の長く延びた心が、上の端は白くなり、その下は朱色になつて、氷柱のやうに垂れた蠟が下には堆く盛りあがつてゐる。澄みきつた月が、暗く濁つた燭の火に打勝つて、座敷は一面に青みがかつた光を浴びてゐる。どこか近くで、蟋蟀の聲が笛の音に交つて聞える。甘利は瞼が重くなつた。忽ち笛の音がとぎれた。「申し、お寒うはござりませぬか。」笛を置いた若衆の左の手が、仰向になつてゐる甘利の左の胸を輕く

押へた。丁度淺葱色の袷に紋の染めぬいてある邊である。甘利は夢現の境に寛いだ襟を直してくれるのだなと思つた。それと同時に、氷のやうに冷たい物が、たつた今平手で障つたと思ふ處から、胸の底深く染みこんだ。何とも知れぬ溫い物が逆に胸から咽へ騰つた。甘利は氣が遠くなつた。

三河勢の手に餘つた甘利を容易く討果して、髻をしるしに切取つた甚五郎は、鼯鼠のやうに身輕に小山の城を脫けて出て、從兄源太夫が濱松の邸に歸つた。家康は約束通り甚五郎を召出したが、目見えの時一言も甘利の事を言はなんだ。蜂谷の一族は甚五郎の歸參を快くは思はぬが、大殿の思召を彼此言ふことは出來なかつた。

甘利が死んでから中一年置いて、家康が多年目の上の瘤のやうに思つた小山の城が落ちたが、それはもう勝頼の滅びる悲壯劇の序幕であつた。

武田の滅びた天正十年程、德川家の運命の秤が亂高下をした年はあるまい。明智光秀が不意に起つて信長を討取る。羽柴秀吉が毛利家と和睦して弔合戰に取つて返す。旅中の家康は茶屋四郎次郎の金と本多平八郎の鎗との力を藉りて、纔かに免れて岡崎へ歸つた。さて軍勢を催促して鳴海まで出ると、秀吉の使が來て光秀の死を告げた。

家康が武田の舊臣を味方に招き寄せてゐる最中に、小田原の北條新九郎氏直が甲斐の一揆をかたらつて攻めて來た。家康は古府まで出張つて、八千足らずの勢を以て北條の五萬の兵と對陣した。此の時佐橋甚五郎は若武者仲間の水野藤十郎勝成と

茶屋四郎次郎 名は清延 家康の近習 後安南貿易に從事した 慶長元年(二二五六)歿 年五十五

本多平八郎 名は忠勝 家康の家臣 伊勢桑名城主 慶長十五年(二二七〇)卒 年六十三

北條新九郎氏直 氏政の子 天正十八年(二二五〇)秀吉に攻め破られ間もなく卒した 年三十

古府 山梨縣西山梨郡相川村古府中 甲府市の北にある高地 武田氏の舊城

若御子　山梨縣北巨摩郡若御子村
水野藤十郎勝成　家康の家臣　備後福山城主　慶安四年(三三一)卒　年八十八
小田原　北條氏直
石川與七郎數正　德川氏の世臣　美濃深志城主

一緒に若御子で働いて手を負つた。年の暮に軍功のあつた侍に加增があつて、甚五郎も其の數には漏れなんだが、藤十郎と甚五郎との二人には賞美の詞が無かつた。

天正十一年になつて、遠からず小田原へ二女督姫君の輿入があるために、濱松の館の忙がしい中で、大阪に遷つた羽柴家へ祝の使が行くことになつた。近習の甚五郎がお居間の次で聞いてゐると、石川與七郎數正が御前に出て、大阪への使を承つてゐる。

「誰か心の利いた若い者を連れてまゐれ。」と家康が言ふ。

「さやうなら佐橋でも。」と石川が言ふ。

やゝ久しい間家康の聲が聞えない。甚五郎はどうした事かと思つてゐると、やつと家康の聲がする。

「あれは手放しては使ひたうない。此の頃身方に附いた甲州方の者に聞けば、甘利はあれを我が子のやうにかはいがつてをつたげな。それにむごい奴が、寐首を掻きをつた。」

甚五郎は此の詞を聞いて、ふんと鼻から息を漏らして輕く頷いた。そして、つと座を起つて退出したが、かねて同居してゐた源太夫の邸へも立寄らずに、それきり行方が知れなくなつた。源太夫の家内の者の話に、甚五郎は不斷小判百兩を入れた胴巻を肌に着けてゐたさうである。

天正十一年に濱松を立退いた甚五郎が、果して慶長十二年に朝鮮から喬僉知と名乘つて來たか。それともさう見えたのは家康の僻目であつたか。確かな事は誰にも分らなんだ。併し佐橋家のものは、人に問はれても、「一向知らぬ。」と言張つた。

木端　丸子氏　江戸の俳人　安永二年(二四三三)歿

四方赤良　本名太田覃　又の號は蜀山人　徳川幕府の士　文政六年(二四八三)歿　年七十五

宿屋飯盛　石川雅望　國學者　江戸の人　文政十三年(二四九〇)歿　年七十八

天地の　力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむるは歌なり(古今集序)

で、根が人形のやうに育つた人參の上品を非常に多く貯へてゐることが後に知れて、あれはどうして手に入れたものかと訝しがるものがあつた。(鷗外全集)

二二　世の中

糸瓜　　木端

世の中は何のへちまと思へども、
　ぶらりとしては暮されもせず。

早蕨　　四方赤良

早蕨が握りこぶしを振りあげて、
　山の横つらはる風ぞ吹く。

歌人　　宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ、天地の
　動き出してはたまるものかは。

月　　朱樂菅江

天の原月すむ秋を眞二つに
　ふりわけ見ればちやうど仲麿。

富士山　　鯛屋貞柳

富士の山夢に見るこそ果報なれ、
　路銀もいらずくたびれもせず。

郭公　　頭光

ほとゝぎす自由自在にきく里は、
　酒屋へ三里、豆腐屋へ二里。

食膳　　唐衣橘洲

朱樂菅江　本名山崎景貫　幕府の士　寛政十年(二四五八)歿　年六十一

天の原　天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

鯛屋貞柳　本名榎並善八　大阪の人　享保二十年(二三九五)歿　年八十二

頭光　本名岸誠之　江戸の人　寛政八年(二四五六)歿　年七十

唐衣橘洲　本名小島泰從　江戸の人　享和二年(二四六二)歿　年六十

茱もなき　心なき身にも哀れは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮（西行法師）
元杢網　通稱大野屋喜三郎　江戸の人　文化八年（二四七一）歿　年八十一
鹿津部眞顔　本名北川嘉兵衞　江戸の人　文政十二年（二四八九）歿　年七十七
馬場金埒　本名大阪屋甚兵衞　江戸の人　文化四年（二四六七）歿
雪ならば　雪ならば幾たび袖をはらはまし花の吹雪の滋賀の山越

茱もなき膳にあはれは知られけり、
　しぎやき茄子の秋の夕ぐれ。　元杢網

田樂

田樂の木の芽にはらもはるの野や、
　霞のおびをゆるめてぞ喰ふ。　鹿津部眞顔

柳

あらそはぬ風の柳の絲にこそ、
　堪忍ぶくろ縫ふべかりけり。　馬場金埒

山越

雪ならばいくら酒手をねだられん、
　花のふゞきの滋賀のやまかご。

坪内逍遙　名は雄藏　英文學者　劇作家　文學博士　早稲田大學名譽教授　安政六年（二五一九）岐阜縣生
小松原　千葉縣安房郡東條村にある原野
日蓮上人　安房の人　日蓮宗の開祖　弘安五年（一九四二）寂　年六十一
長英坊
乘觀坊　共に日蓮の弟子僧

二三　小松原

坪内逍遙

一　小松原の一部

一面の平舞臺は小松原の心にて、間近く連山見え、低き丘あれど、大體より見て平地ともいふべき名の如き小松原。どこからも通行が出來るゆゑ、道は四通八達といつてもよい。時雨は今は全く霽上つて、大分高いところに出てゐる十一日の宵月は、浮雲に屢々遮られて、四下（あたり）時々薄昏くなる。こゝに、中央に日蓮上人、僧衣に袈裟を掛け、手に數珠を持ち、立身。上手に長英坊・乘觀坊二人が、二人とも幾らか手疵を負つた體にて、長英は戒刀を、乘觀は敵から奪つたらしき白刄を提げてゐる。長英と乘觀とは跪いて上人を諫め止めてゐる體である。

乘觀　勿體ないことを仰せられます。（といつたが、感極まつてか、あとを

鏡忍　日蓮の弟子

續けかねる。と)

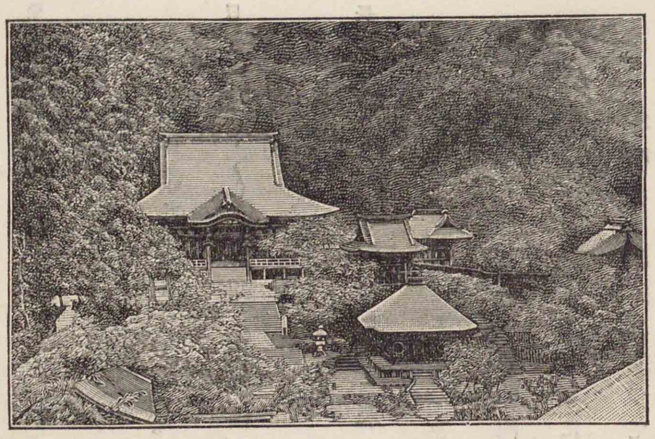
長英　(が引取って)どうぞ、こゝは私共にお任せ下さいまして、どうぞ、是非お落ち遊ばして下さいまし。

日蓮　いや〳〵、さうでない。鏡忍を見殺しにした上に、お前らまでどうして見捨てることが出來よう。はじめから法華經のために獻つた此の命を、正に法華經のために失ふといふ、これほどの悦が又とあらうか。人間はだれしも一度は死ぬのぢやが、かういふ死に方は、一切衆生を生返らせる死に方で、最も望む所ぢや。お前ら最早手向ひは決して無用ぢや。題目を高う唱へ〳〵して命を終らう。

乘觀　(泣きながら)鏡忍をはじめ私共にまで、それほどの御憐愍をお掛け下さいまするは、有りがたいとも忝ないとも、申し上げ

天津　千葉縣安房郡天津町

やうはございませんけれど、日本國の只一本の大柱ともお頼まれ遊ばす大聖人が、こんな鼠輩のために大切なお命をお捨て遊ばすべきぢやございません。是非ともお落ち遊ばして下さいまし。



清澄寺

長英　もうこゝから天津まではたかゞ十一二町でございます。あそこへお落ち遊ばすまでは、きつと私共が防ぎます。どうぞお落ち下さいまし。

日蓮　いや〳〵、其の志は嬉しいが、此の上お前らを見殺しにする

東條　東條庄の地頭左衞門尉東條景信

ことは、どうしても出來ん。お前らと一緒に死なう。

乘観　其のお慈悲のお言葉は、失禮ながら、大日本國をお忘れ遊ばしたお言葉でございます、國家の爲でございます。是非ともお落ち下さいまし。（泣きながら言ふ。）

日蓮　いや〳〵、法難の爲に死ぬのが、それが、卽ち國の爲ぢや。

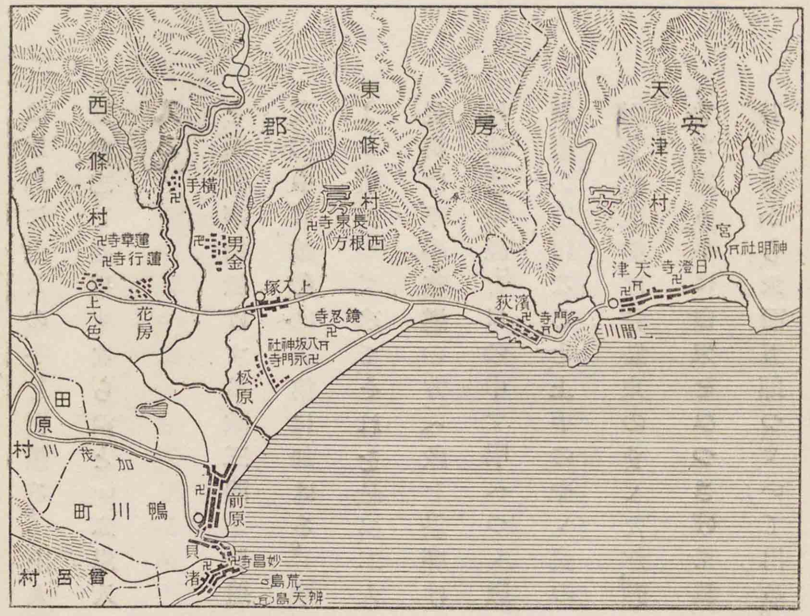
此の時、又鬨の聲。

長英　あゝ、もうやつて來ました。

長英は、無理に上人の手を取つて、下手へ伴はうとする。上人は行くまいとする。この內、上手より東條の兵ども、あるひは腹巻姿、あるひは狩裝束のまゝにて、手々に長巻其の他の武器を振りかざし、おひ〳〵に追ひ迫つて來て、競ひかゝる。乘観坊太刀を振つて之を逆襲し忽ち追返し、尙追擊しつゝ上手へ入る。此の間に長英坊は無理に上人の手を引張る。上人は、目前逆襲して働いてゐる乘観の志を無にもならぬといふ思入で、長英に引かれて下手の奥に入る。

と、乘観が拔駈けする敵三四人を追駈けて、又上手から出て來る。其の中に敵勢は次第に加はる。乘観危くなる。と、長英が下手奥より駈戻つて來て、それを救ひ、二人にて苦戰し、とゞ乘観は上手へ、長英は下手（花道の方）へ敵を追靡けつゝ入る。二僧とも、始終「南無妙法蓮華經」を口の中で唱へつゝ戰つてゐる。

舞臺が空になると、上手のやゝ奥の方の丘の蔭より東條左衞門尉景信、服裝は狩裝束のまゝだが、頭には侍烏帽子をいたゞき、馬にまたがり、手に白刄をひつさげて眞先に駈けて出る。少し後れて、其の後から、天面五郎つゞいて出る。中央まで來ると、景信は馬を



小松原附近

止めて、あちこちを見廻すことあり て、

景信　坊主め、どこへ行きやがつたか。まださう遠くへ行く筈はない、どつかに隱れてゐるのに相違ない。逃がしつちまつちや殘念だ。どつちへ行きやがつたらう。五郎、そこいらの松の陰を搜して見ろ。

天面　かしこまりました。

と其の邊をあちこちと搜し廻る。此のうちに景信は、下手の奥を透して見て、

景信　んゝ、たしかに坊主らしい後影があそこに見えるぞ。五郎、つゞけ。

と馬に一角入れる。途端に、舞臺を薄昏くして又閧の聲を聞かせ、よきほどに明るくする。

二　小松原の他の一部

前とほゞ同じ樣な松原、但し前のよりも多少丈の高きひよろ松が簇生して、林の形をなしてゐる部分。月の在りどころも、前の場と

小草　東條家の老僕左藤次の女　年十七

は異つてゐる。

こゝに中央のやゝ下手寄りに、下手へ向いて日蓮上人前の場の通りの服裝にて立身。其の前に、土下座して、上人を仰ぎ見て、何事か訴へてゐるらしいのは小草(をぐさ)である。少し下手の其の脇に長卷が置かれてある。

日蓮　それは殊勝なことぢや。それほどに思うてくれるのは嬉しい。禮をいひますぞ。けれども、わしと一緒に行くのは危ない。途はよう知つてをる。わしはやつぱり一人で行く。殊にそんな刄物なんかは持つてをらんはうがよい。そこへ棄てゝおいて、早うこゝを離れなさい。

小草　お上人さま、いゝえ〳〵、それはいけません。まだどんな亂暴な者が追つかけて來るかも知れませんから、わたくしがお伴します。さ、早くすぐお出掛けなさいまし。もう少うしいらつしやれば、本海道へ出ます。きつともう天津の殿さまがお迎へに來てゞございます。もうすぐでございます。さ、早くお出かけなさいまし。

本海道　東海道の本道
天津の殿さま　天津城主工藤左近丞吉隆

東條村小松原

此の途端、上手にて東條景信の聲にて、

景信　しめた。たしかに日蓮だ。五郎、つゞけ。

と叫ぶ聲が聞える。小草覺えず長卷を取つて突立ち、上手へ廻る。

上人これを止めようとするうちに、上手より東條景信、前の場の通り、馬を走らせ出で來り、

景信 日蓮坊主、そこ動くな。

といひもあへず、太刀を振りかぶつて切りかけようとする。小草、咄嗟に上人を押隔て、我武者羅に長巻を振廻して景信を遮る。景信いらつて、

景信 えゝつ、邪魔するな。どけ〳〵。

と流石に斬りおろしかねて二三度長巻を撥ねのけたが、向うるさく遮るので大いに怒り、

景信 えゝ面倒な。

とみね打をくらはす。これにて小草は「あつ！」と叫んでよろめき、長巻を取りおとしてばつたり倒れる。これより先、上人は小草を

とゞめかねて觀念し、傍の松陰に佇みて小草の殊勝な働を打ちまもつてゐる。小草が「あつ！」と叫んで倒れると、景信はつと馬を驅け寄せて、斬つてかゝる。上人は景信が小草を斬り殺したと思ひ、憤激し、今驅寄る景信をはつたと睨み、

日蓮 無道人めが。

と一喝する。馬は物におびえたやうに、たぢ〳〵とあとじさる。此のうち小草は又むつくと起上つて驅寄り、馬の尻尾を摑んで手強く引く。馬あばれる。景信もてあます。途端に天面五郎が驅けて來て、此の體を見るや否や、小草の肩先を一刀に斬りさげる。これにて小草は尻尾を離して倒れかけたが、踏みこたへて、落ちて居た長巻を拾ふや否や、

小草 南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。……

妙一の九字　南無妙法蓮華經 第一

と高聲に唱へながら、無我夢中の體で五郎に斬つてかゝる。五郎あしらひかねて花道の中程まで退る。此の時景信は再び上人の間近く馬を進めて、

景信　邪宗を宣傳して愚民を惑はし、剰へ天下の政道を亂さうとする妖僧日蓮、覺悟しろ。

と言ひもあへず、上人に斬つてかゝる。上人は之より先、數珠を握つて徐かに「妙一」の九字を切りをはり、早速に數珠の母珠にて景信の恰も斬りおろした一刀を受ける。と、母珠が割れたらしく、太刀先が上人の額に及ぶ。と覺えず數珠を落して、片膝を地に突く。景信二の太刀を打ちおろさうとする。此の途端向ふ(揚幕)で遠く箭聲が聞えて、一箭飛び來つて、景信馬の平首に立つ。これにて馬が逆立となりて、景信は落馬する。と、馬はすぐ上手へ駈去る。此

北浦兄弟　忠吾と忠内 共に工藤吉隆の家來

の時、小草は五郎に又一太刀斬られて、長卷を落し、倒れる。五郎は景信の落馬を手を負うたと誤解し、あわてゝ肩に掛けて、上手へ急ぎ退き去る。上人はしづかに起上り、額の傷を懷中紙を取りいだして拭いてゐる。と、向ふ(揚幕)より、工藤左近丞吉隆、題目曼荼羅を結び付けたまゝ、滋籐の弓を脇ばさみ、騎馬にて、北浦兄弟外二人を隨へて駈けて出で、月の光にて松林の方をきつと見て、上人の無事なのを見つけ

吉隆　おゝ、御安泰だ。……

と片手に天地を拜して、家來を顧みて、

喜べ。見ろ、上人は御無事でいらせらるゝぞ。つゞけ。

と本舞臺へ來り、急ぎ馬より飛びおりて、上人の前へ主從一同平伏する。吉隆は上人を三拜して、

いまだ親しくはお結縁を蒙りませんでしたが、手前儀は天津の工藤吉隆でございます。御危難と承りまして、取るものも取りあへず駈附けましてございます。御安泰であらせます尊顔を拜しまして、此の上の喜はございません。手前參りました上は、恐れながら、必ず御安心遊ばしませ。

日蓮　左近どのでござるか。まだお臥床中と承りをつたのに、早速の御來護、かたじけなうござる。

吉隆　(と此の時吉隆は上人の手疵にはじめて目をつけて、大いに愕き、)や、上人にはお手疵を負はせられましたか。それ、忠吾、手おくれにならんうちに

日蓮　(制して)いや／＼、決して御心配なさるな。こりやほんのかすり疵ぢや。……わしよりも弟子の者兩三人、わしを落さう

とて、今まだあちらで、多勢の敵と苦戰してをる。或はもう落命したかも知れんが、どうか彼等を救つてやつて下さい。

吉隆　では、あのお弟子がたが。心得ました。すぐさまお救ひ申しませう。では(と北浦兄弟を見返り)汝等は上人を警固申して、先づともかくも、あれなる鎭守の森まで御案内申し上げて、早速お手疵のお手あてをしろ。おれはお弟子がたをお救ひ申して、すぐあとから行く。萬一手間取るやうであつたら、先へ邸へ御案内申せ。……御免下されませ。(と吉隆馬に乘らうとする。)

日蓮　(とめて)いや／＼、其の鎭守への路は心得てをる。御案内には及ばん。それよりも敵は多勢ぢや。御家來衆は是非悉く御連れなさい。小勢では心元ない。

吉隆　お言葉ではございますが、まだ何處にどういふ伏勢がをるやも圖られません。臆病を名代の東條の家の子供なんどが、何十人參りませうとも、忽ち追つ返して、お供を致します。かやう申す間も心がせきます。どうかともかくもお立退き下さいまし。どうぞ是非。（と促すが、上人は動かない。）では、せめて兩人だけ。源次もお供をしろ。それ、忠内早く御介抱して御案内をせい。

日蓮　それほどにいはれるなら、一足先へ行きませうが、介抱には及ばん。わしの介抱の代りに、あの少女を介抱してやつて下さい。あゝ憫然なことぢや。（二人は上人の傍に附添ふ。）

と上人は瞑目して、口の中にて題目を唱へる。忠内寄つて半死半生の小草を抱き起し、顔を見て、

東條彌八郎　名は景房　景信の甥

忠内　お、此の娘は。……

と又鬨の聲が聞える。此のうち吉隆は手早く曼荼羅を弭から脱して卷きをさめ、押戴きて懷中し、

吉隆　さ、早く〳〵……御免下されませ。

と、又馬に跨る。忠内は他の一人と共に、片息になつてゐる小草を介抱して、上人を促して花道より向ふ揚幕へ入る。と上手より東條彌八郎を先に、四方木の兵太隨ひ、新手の兵の心にて、勢ひ込んで駈けつける。

彌八　工藤どのに物申すぞ。各宗を譏謗し、鎌倉殿の政道を非議し、魔法を使つて世を亂す狂坊主の日蓮を庇ひ立てめさるるからは、お手前は明白に鎌倉殿の罪人でござる。容赦はいたさんぞ。覺悟めされ。

吉隆　さういふお手前らこそ惡宗門の肩を持つて聖僧を讒誣し、罪もなき良民を無法に殺戮して悔ゆることなき殘忍無慈悲の無道人ぢや、天に代つて吉隆が誅戮する。覺悟なさい。

と弓を投捨てゝ、太刀を拔く。

彌八　何を。

東條の兵ら一齊に競ひかゝる。暫くごつちやの立廻り。とゞ東條方叶はず、上手へ逃げる。吉隆主從それを追ひうち、共に上手へ入る。

又舞臺を薄暗くする。其の薄暗い中で、遠く又鬨の聲。其の聲の消えてしまふ頃、段々明るくなる。と、

三　小松原附近の鎭守の杜

中央に、小さき神社。其の後にも、左右にも、年を經た樹木竝び立ち、よき處に鳥居。上手の一隅に御手洗の古き泉。群樹の透間より間近く海が透けて見える。

こゝに、中央に上人切株に腰掛け、忠內は御手洗を汲んで來て、他の一人と共に上人の顏の疵を洗ひ、繃帶を參らせなどしてゐる。下手には小草の死骸が橫たへてある。

忠內　嘸、お痛み遊ばすでございませう。

日蓮　いや〳〵、もう痛みは薄らいだ。お太儀、お太儀。左近どの事が心懸りぢや。わしはこゝにかうしてをれば大丈夫ぢや。往つて見て來て下さい。

忠內　かしこまりました。

と忠內は他の一人を殘しておいて、急いで向ふ(揚幕)へ入る。と、上

人はじつと小草の死骸を見やつて、

日蓮　あゝ殊勝なのはあの少女ぢや。（と、徐かに立寄つて、暫く合掌默禱して）良藥は、其の良藥たることを絕えて知らざらん者と雖も、之を服すれば病癒ゆる。此の一少女、生前は無智蒙味、其の命を終る數刻の前までは、未だ曾て妙經の一語をだに會得せず、況や其の甚深の義理をや。然るに一旦にして妙法の德に感じ、口に南無妙法蓮華經を唱へ續けて、勇猛壯烈の武士の如くに、妙法の爲に命を獻じ了んぬること此の如し。其の志は古の聖者にも劣るべからず。一心欲見佛、不自惜身命、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

此の時、向ふより、花道を經て、痛手を負ひて刀を杖によろめきつゝ歩む吉隆を右左より介抱して、忠吾・忠內、又其の後よりは吉隆の家來二人に介抱されて、同じく手負ひの乘觀・長英出で來り、やうやうにして本舞臺へ來ると、皆々よろしく上人の前に平伏して、會釋する。中にも吉隆は上人の顏を見上げると同時に、嬉しげに打笑んだが、氣がゆるんだらしくがつくりと瞑目し、もう物は言はれぬらしく、只合掌するのみである。

上人は、痛ましげに其の傍に立寄りて、しづかに、

日蓮　吉隆どの。吉隆どの。

と二度呼ぶと、吉隆は微かに目をあいたが、又忽ち目を瞑ぎて再び合掌する。上人も暫く無言で落淚の體。皆々顏を擧げ得ず、泣いてゐる。歔欷の聲も聞える。上人はこゞんで、吉隆の手を取つて、耳元に口を寄せて、

日蓮　無上妙法の爲に一身を獻ぜられた大功德、天晴のお手柄で

ござつたぞ。　姿は俗のまゝぢやが、見事に不惜身命の大行者たる務をお果しなされた。　今日唯今、日蓮が上人號をまゐらせて日玉上人と呼び申すぞ。　吉隆どの、吉隆どの。

これにて吉隆は又かすかに目をひらき、につこりと笑み、又目をふさぐ。　其の間少しも合掌の姿勢を崩さない。

日蓮（東京帝室博物館藏）

日蓮　日蓮も或は程なく參るであらう。　が若しお手前のはうが先であつたら、あの世に往つて、立派に、梵天・帝釋・四大天王・閻魔大王らに名を名宣つてお聞かせなさい。　日本第一の法華經の行者日蓮坊に隨つて、法難に身を捨てたとお名宣りなさい。　歡んでお迎へなされうぞ。　あゝ如來の現在にすら猶怨嫉多し。　況や滅度の後をや。　身輕法重、死身弘法。　（と唱へ了りて、更に形を改め）今身より佛身に至るまで能く保ち奉る。　南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へ續ける。　吉隆落入る。　皆々落涙しつゝ、合掌して同音に、

皆々　南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

此の唱題目の續く間に、靜かに幕。（法難）

四大天王　持國天王　廣目天王　增長天王　多聞天王

如來の現在にすら　而此經者、如來現在、猶多怨嫉。況滅度後。（法華經、法師品）

高山樗牛　名は林次郎　評論家　文學博士　山形縣鶴岡市生　明治三十五年歿　年三十[illegible]

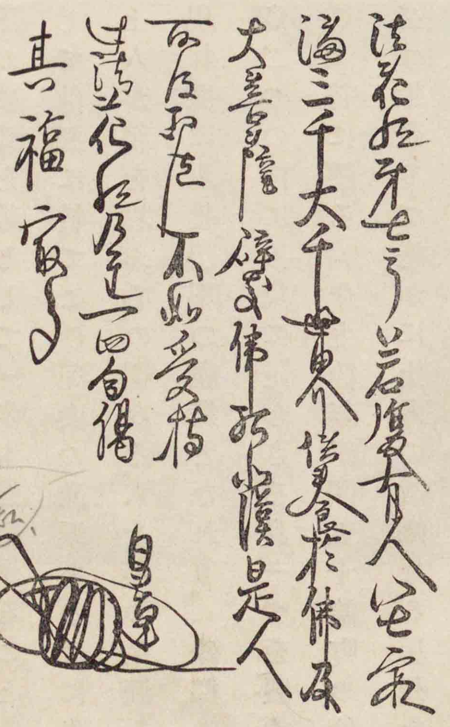
二四　日蓮上人

高山樗牛

日蓮上人は獨り鎌倉時代のみならず、日本歷史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、「法華經のために此の臭き頭を刎ねられんは、沙に黃金を換へ、糞に米を代ふるなり。」と喝破し、眼中權勢もなく、威武もなき、眞に高天濶地獨立獨步の大豪傑なりき。さりとて、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情、時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に咽ばしむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。この人

武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟を以て、上人と共に種々の迫害を被れり。上人龍口に斬られんとせし時は、路上に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ幾多の消息文を寄せてその至情を表し給へり。就中「殿にして若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。假令釋尊及び十方の諸佛手を引き袂を捉へて淨土に



日蓮筆蹟

龍口　神奈川縣鎌倉町西一里餘

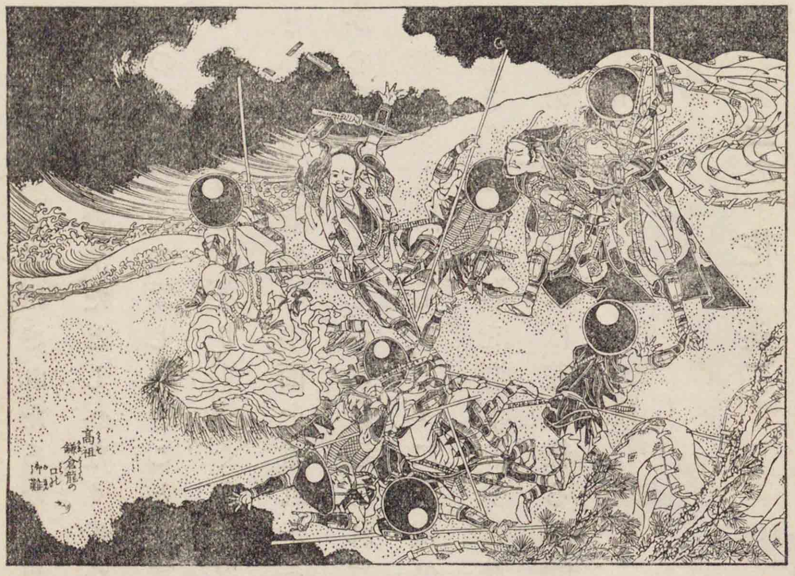
筆蹟　法華經第七云、若復有人以七寶滿三千大千世界供養於佛及大菩薩、辟支佛阿羅漢、是人所得功德不如受持此法華經乃至一四句偈其福最多。（日蓮　華押）

身延　甲斐國南巨摩郡なる身延山久遠寺　日蓮宗の總本山
池上　武藏國荏原郡池上にある本門寺　日蓮入寂の靈跡

迎ふとも、振返つて必ず殿と共に地獄に墮すべし」との意を述べられたり。その恩愛の濃やかなること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一歩も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕涙ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年、日本六十六箇國、島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置く處なくして身延山の深谷に隱るゝや、九箇年が間五十餘町の嶮山を、一日に一度は必ず攀登りて、遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せられしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中に之と比較し得べき美談あるか。

上人病篤くして、甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領



龍の口に於ける日蓮の法難

の檀越波木井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井氏に送る書の中にも、馬をいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに「知らぬ舍人を附けて候ては覺束なく覺え候。罷り歸り候はんまで、この舍人を附置き候

はんと存候。と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なくばかの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。かの美はしき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲卽ち刺を織る絲なるにあらずや。

（樗牛全集）

二五　花芒

正岡子規

正岡子規　俳人　歌人　名は常規　伊豫國松山市生　明治三十五年歿　年三十六

われ浮世の旅の首途してよりこゝに二十五年、南海の故郷をさまよひ出でしよりこゝに十年、東都の假住居を見すてしよりここに十日、身は今旅の旅に在りながら、風雲の思なほ已み難く頻に道祖神にさわがされて霖雨の晴間をうかゞひ、草鞋よ脚袢よと身をつくろひつゝ、一個の袱紗包を浮世のかたみに擔うて、飄然と大磯の客舍を出でたる後は天下は股の下、杖一本が命なり。

旅装の子規

旅の旅その又旅の秋の風。

湯本　神奈川縣足柄下郡湯本村箱根山の北麓

國府津・小田原は一生懸命にかけぬけて、はや箱根路へかゝれば、何となく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に白露光あり。

白露の中にほつかり夜の山。

湯本に辿り着けば、一人のをのこ袖を控へて「いざ給へ、好き宿まゐらせん。」といふ。引かるゝまゝに行けばいとむさくろしき家なり。前日來の病もまだ全くは癒えぬに、この旅亭に一夜の寒氣を受けんこと氣遣はしく、やゝ落膽したるが、まゝよ、これこそ風流のはじめ、行脚の眞面目なれ。

だまされてわるい宿とる夜寒かな。

つぎの日まだき起出でつ。一天晴渡りて瀧の水朝日にきらつくに、鶺鴒の小岩づたひに飛びありくは逃ぐるにやあらん、はた

此方へとしるべするにやあらんと、草鞋の運び自ら輕らかに、箱根街道のぼり行けば、鵯の聲左右にかしまし。

我がなりを見かけて鵯の鳴くらしき。

色鳥の聲をそろへて渡るげな。

秋の雲、瀧をはなれて山の上。

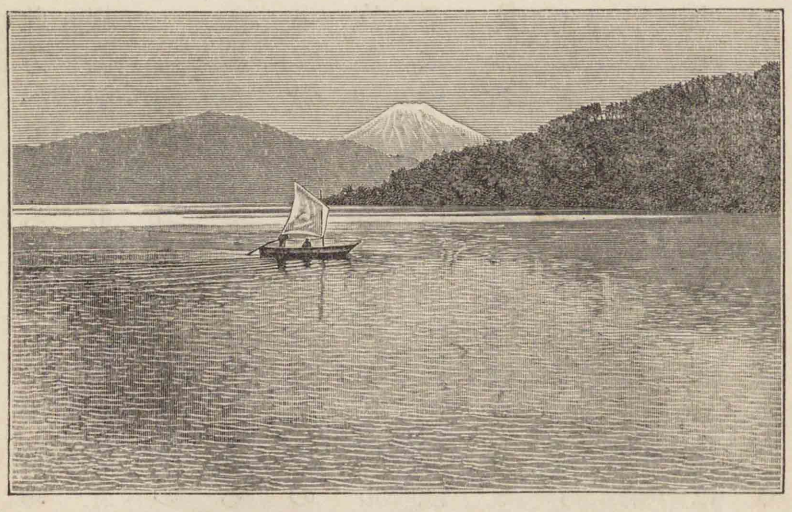
病み疲れたる身の、一足のぼりては一息ほつとつき、一坂のぼりては巖端に尻をやすむ。駕籠舁の頻に駕籠をすゝむるを耳にもかけず、「山路の菊、野菊ともまた違ひけり。」と吟じつゝ行けば、

どつさりと山駕籠おろす、野菊かな。

石原に瘦せて倒るゝ、野菊かな。

などおのづから口に浮みて、はや二子山鼻先に近し。谷に臨めるかたばかりの茶屋に腰掛くれば、秋に枯れたる婆樣の挨拶何

元箱根　箱根山の頂上にある村



箱根蘆の湖

となくものさびて面白く覺ゆ。

「名物ありや。」と問へば、「力餅といふものあり。」とて、大きなる餅の燒きたる二つ三つ盆に盛り來る。

山姥の
　力餅賣る
　　薄かな。

など戯れつゝ、力餅の力を假りて上ること一里餘、杉・樅の大木道を夾み、元箱根の一村

目の下に見えて、秋さびたるけしき、仙源に入りたるが如し。

紅葉する木立もなしに山深し。

千里の山嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏碎きて上り着きたる山の頂に、鏡を磨き出せる蘆の湖を見そめし時の心廣さよ。餘りの絶景に恍惚として立ちもえ去らず、木のくひぜに坐してつく〴〵と見れば、山更にしん〳〵として、風吹かねども冷氣冬の如く足もとよりのぼり、腦天にしみ渡るこゝちなり。波の上に飛びかふ鶺鴒は忽ち來り忽ち去る。秋風に吹きなやまされて、力なく水にすれつあがりつ胡蝶のひら〳〵と舞ひいでたる、箱根の頂とも知らずてやいと心強し。遥かの空に、白雲とのみ見つるが上に兀然として現れ出でたる富士、こゝからも猶三千仭はあるべしと思ふに、更に其の影を幾許の深さに沈めてさゞ波に縮め

箱根關址（廣重筆）

よせられたる、またなくをかし。これより山を下るに、見渡すかぎり皆薄なり。

箱根の關はいづちなりけんと思ふものから、問ふに人なく、探るに跡なし。これらや歌人の歌枕なるべきとて、

關守の
まねくやそれと
來て見れば、
尾花が末に
風わたるなり。

薄の句を得たり。

大方はすゝきなりけり、山の上。

伊豆相模境もわかず花すゝき。

二十餘年前までは、金紋先箱の行列整々として、鳥毛・片鎌など威勢よく振立てゝ〳〵行きかひし街道の繁昌も、あはれものゝ本にのみ殘りて、草刈るわらべの小道一筋を除きて外は、草の生ひ出でぬ處もなく、僅かに行列のおもかげを薄の穗にとゞめたり。

槍立てゝ通る人なし、花芒。

（子規全集）

二六 狐塚

主「此のあたりの者で御座る。某山田を數多持つて御座る。當年は事の外よう出來て御座る。さりながら此の頃は鹿・猿・貉

が出て田を荒します。太郎冠者を呼びいだし、山田の番にやらうと存ずる。やい〳〵、太郎冠者在るか。」

太「はあ。御前に居ります。」

主「汝を呼出す事、別の事でない。當年は身どもの山田が事の外よう出來た。それにつき、此の頃は鹿・猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へいて、鳥獸も來たらば、追うて番をせい。」

太「畏まつて御座る。私一人で御座るか。」

主「いや、後程は次郎も見舞にやらう程に、先づ行け。」

太「心得ました。」

主「さりながら、此の中は狐塚の狐が出てばかすと云ふ程に、ばかされぬ樣にして番をせい。」

太「それはこはい事で御座る。もはや參ります。」

つかはう　遣はさうの意。

主「明日早々歸れ。」

太「はあ。」

主「えい。」

太「扨も〳〵、迷惑な事言付けられた。夜晝使はるゝ、といふは氣の毒な事ぢや。參る程に是ぢや。先づ是にゐて番を致さう。」

主「太郎冠者を山田へ番に遣はして御座る。定めてさびしうしてゐるで御座らう。次郎冠者を見舞につかはうと存ずる。やい〳〵、次郎冠者あるか。」

次「これに居ります。」

主「汝は太儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。」

次「畏つて御座る。」

主「小筒も少し持つて行け。」

次「心得ました。これは扨迷惑なれども、參らずばなるまい。主命ぢや、是非に及ばぬ。これは暗うてどこやら知れる事でない。呼ばはつて見よう。ほうい〳〵、太郎冠者やい。どこに居るぞ」

太「さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。おのればかさるゝ事では無いぞ。先づ眉毛をぬらさう」

次「ほうい〳〵」

太「ほうい〳〵。こゝにゐるは」

次「どこにゐるぞ」

太「こゝにゐるは。やあ、次郎冠者か」

次「なか〳〵。賴うだ人が言付けられて伽に來たは」

太「ようこそおりやつたれ。扨も〳〵、ようばけた。そのまゝの

次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身共が追うたれば、こなたの山へくわら〳〵と逃げたは」

次「それはでかした」

太「どつこへ。やる事ではないぞ」

次「これは何とするぞ」

太「何とするとは。狐めばかさるゝ事ではないぞ」

次「おれは次郎冠者ぢや」

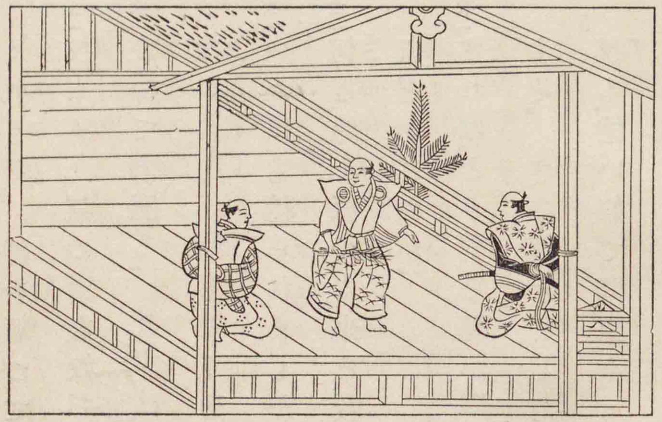
太「何の次郎冠者。おのれ縛つて、此の柱にくゝつて置いて。狐殿、よい體の。おのれ今に皮を剝いでくれうぞ」

主「太郎冠者・次郎冠者を山田へ遣はして御座る。心もとなう御座る。見に參らうと存ずる。ほうい〳〵。太郎冠者やい。

がつき 餓鬼の意。

次郎冠者やい。ほうい〳〵」。
太「是はいかな事。また狐が出をつた。あれは頼うだ人の聲ぢや。是も捕へてやらう。ほうい〳〵」。
主「ほうい〳〵。どこにゐるぞ」。
太「こゝにゐます」。
主「やあこれにゐるか。寂しからうと思うて見舞に來た。次郎冠者を先へ遣したが」。
太「なか〳〵。あれにゐます。これはいかな事。是もようばけた。そのまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれだまさるゝ事ではないぞ」。
主「これは何とするぞ。身共ぢや」。
太「おのれもようばけた。先づ縛つて、此の大木にくゝりつけて

置いて、致しやうがある。



狐塚(續狂言記)

狐は松葉でふすべるといやがるといふ。ふすべてやらう。さあさあ尾を出せ。鳴け〳〵」。
主「おのれ太郎冠者め。主を此の樣にして。罰當りめ」。
太「何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者もふすべてやらう。さあさあ鳴け〳〵、こん〳〵といへ」。
次「これは何とする」。
太「あれや〳〵、いやがるは、いやがるは。おのれ二匹ながら鎌を取つて來て、皮を剝いでくれう

ぞ。待つてをれ。ようばかさうと思うたなあ。唯今殺してくれうぞ。鎌を取つてくるぞ。」

主「扠も〳〵、氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。」

次「左樣で御座る。此方は賴うだ御方か。」

主「なか〳〵。汝も縛りをつたか。」

次「いかにも縛られました。」

主「何と、鎌を取つて來る、殺さうと言ひをつたが、何と、そちが繩はほどかれぬか。」

次「されば、どうやら繩が解けさうに御座る。解けますぞ、解けますぞ。さあ解きました。どれ〳〵、此方も解きませう。扠も扠も、憎い奴で御座る。何としたもので御座らう。」

主「いや〳〵、此の體ではそばへよるまい程に、もとの樣にしてゐ

て、これへ來たらば捕へて、あいつをゆりにあげう。」

次「一段とよう御座らう。」

主「さあ、是へよつて元の樣にしてゐよ。」

次「心得ました。」

太「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で殺してくれう。さあ、今打殺すぞ、打殺すぞ。」

主「それや、次郎冠者。」

次「心得ました。」

主「おのれ、にくいやつの。次郎冠者足を持て。」

次「心得ました。」

主「さあ、ゆりに上げ、ゆりに上げ。」

太「これは、何と狐どもするぞ。」

主「狐とはまだ、おのれめは、にくいやつの。縛り居つたがよいか。これがよいか。これがよいか。」

太「扠は頼うだ人。次郎冠者か。免させられ。まつぴら御ゆるされ。まつぴら御ゆるされ。」

次「どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。」（續狂言記）

勝海舟 名は安芳 政治家 舊幕臣 海軍卿 樞密顧問官 伯爵 明治三十二年薨 年七十七

二七 氷川清話

勝海舟

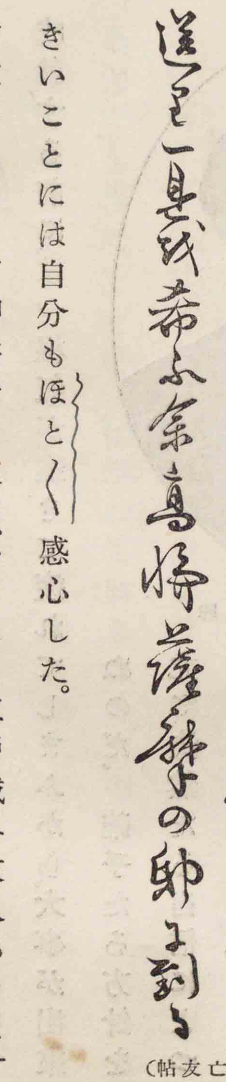
世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいけぬ。「さあ、何でも來い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ。」といふ料簡で行くがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白みがついて來て、物事は造作もなく落着してしまふものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どうせうか、かうせうかと躊躇するやうになつてはもういかぬ。若し一度で出來なければ何度でも出來る所までやり通す。兎角世間の人は、事業の成就する前に、はや根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出來ぬのだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が來て、これまで敵視して居た人の中にも互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出來るものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。そこに行

勝海舟

西郷南洲 名は隆盛 明治維新の元勳 參議 陸軍大將 明治十年歿 年五十二

筆蹟 戊辰三月官軍先鋒至品川十五日を期して侵撃の令ありと同十四日書を先鋒參謀に送り一見を希ふ余高輪薩摩の邸に到る

くと、西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎭撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵味方であつたといふことは何處へか忘れてしまつたやうだ。其の度胸の大

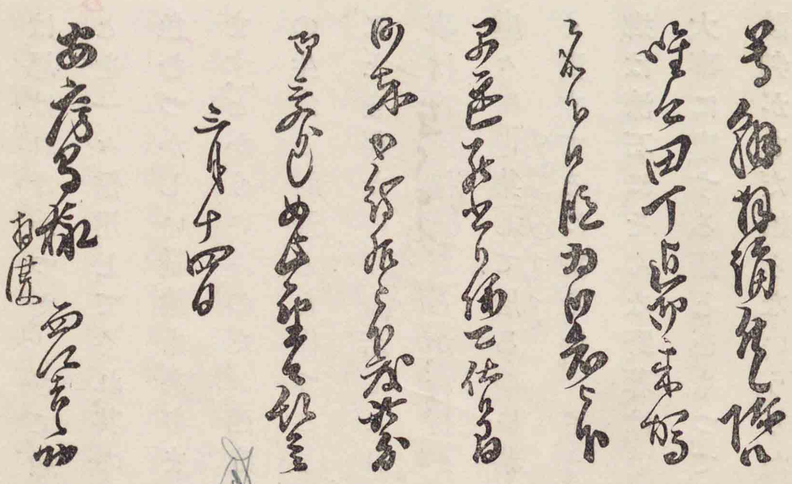


勝海舟筆蹟(亡友帖)

きいことには自分もほと〳〵感心した。

官軍が品川まで押寄せて來て、いまにも江戸城へ攻入らうとする際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝、田町の薩摩屋敷

筆蹟 貴翰拜誦仕候陳は唯今田町迄御來駕被成下候段爲御知被下早速罷出候儀可仕候間何卒御待居被下度此旨御受迄如此御座候頓首 三月十四日 西郷吉之助 安房守樣 拜復



西郷南洲書翰(亡友帖)

までその談判にやつて來た。當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、從者を一人連れたのみで出掛けた。まづ一室へ案内されて暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を從へ、平氣な顔で出て來た。「これは遲刻しまして誠に失禮」と挨拶をしながら座敷に通つた。其の樣子はすこしも一大事を眼前に控へたものと

は思はれなかつた。さて愈〻談判になると、西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、其の間に一點の疑念をも挾まない。「色色むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御引受します。」とかういふのだ。西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出來、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、「いや、貴樣のいふ事は自家撞着だ。」とか、「言行不一致だ。」とか、「澤山の暴徒があの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある。」とか色々喧しく責立てるに違ない。さうなると談判は忽ち破裂だ。併し西郷は流石にそんな野暮はいはない。よく大局を達觀する明と大事に處する斷とをもつてゐた。

談判がまだ始らないうちから桐野などといふ豪傑連は、大勢次

の間へ來て竊かに樣子を覗つて居る。薩摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひし〳〵と詰めかけて居る。實に殺氣陰々として、物凄い程であつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景は少しも眼に入らぬものゝ如く、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると、近傍の街々に屯集して居た兵隊はどつと一時に押寄せて來たが、自分が西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。

此の時、自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終座を正して、手を膝の上に載せ、少しも敗軍の將を遇するといふやうな風が見えなかつたことだ。その度量の大きいことは、いはゆる天空海濶で、見識ぶるなどいふことは固より少しもなかつた。知識の點

に於ては或事柄は自分の方が上で、外國の事情などは却て自分が話して聞かせた位だつたが、その氣膽の大きいことに至つては絶倫と謂ふべく、議論も何もあつたものではなかつた。

（氷川清話）

二八 南洲遺訓

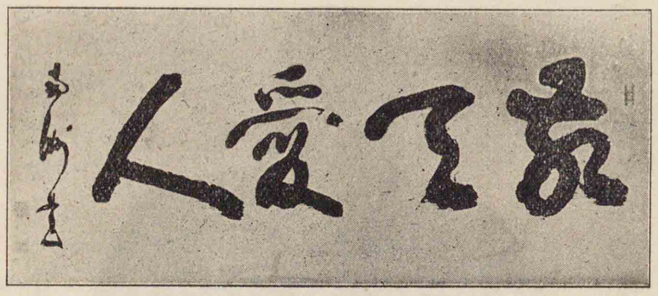
西鄕南洲

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふるときに臨み、作略を用ひて一旦その差支を通せば、あとは時宜次第工夫の出來る樣に思へども、作略の煩きつと生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる樣なれども、さきに行けば成功は早きものなり。

筆蹟

敬レ天愛レ人。 南洲書

道は天地自然のものにして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛するなり。



西鄕南洲筆蹟

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出來ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出來ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、皆自ら愛するがためなれば、決して己を愛せぬものなり。

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

西郷南洲　（キヨソネ筆）

道を行ふ者は天下擧つて毀るとも足らずとせず、天下擧つて譽むとも足れりとせず。自ら信ずること篤きがゆゑなり。

天下後世までも信仰悅服せらるゝものは、只是一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人その數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるゝは僥倖の譽なり。誠篤くば、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。

（南洲遺訓）

中學國文教科書 卷五終

文部省檢定濟

昭和五年一月廿一日 中學校國語科教科用

明治三十九年十月十五日印刷
明治三十九年十月十八日發行
明治四十年一月十一日修正再版發行
明治四十三年十一月五日修正三版發行
明治四十四年一月廿八日修正四版發行
明治四十四年十一月十五日修正五版發行
明治四十五年二月廿六日修正六版發行
大正元年十月三十日修正七版發行
大正元年十二月廿三日修正八版發行
大正三年十月廿八日修正九版發行
大正四年一月五日修正十版發行
大正六年一月三十日修正十一版發行
大正七年一月五日修正十二版發行
大正十年一月廿八日修正十三版發行
大正十一年一月十日修正十四版發行
大正十二年十月十八日修正十五版發行
大正十四年十月廿八日修正十六版發行
大正十五年二月六日修正十七版發行
昭和四年九月二十日修正十八版發行
昭和五年一月十日修正十九版印刷
昭和五年一月十三日修正十九版發行

著作權所有

定價	
卷一、四	金七十二錢
卷三、五	金七十三錢
卷二、六、七、八	金七十錢
卷九、十	金六十七錢

編者 吉田彌平
東京市神田區通神保町六番地

發行者 上原才一郎
東京市神田區通神保町六番地

發行所 光風館書店
東京市神田區通神保町六番地
(電話長神田三〇八七番)
(振替口座東京三三七番)

印刷者 山崎與吉
東京市神田區通神保町六番地

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

中學國文教科書 卷五

三十五

[illegible]義博

広島大学図書
2000054740